
幼なじみは 魔法使い！？ 第2章

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみは 魔法使い！？ 第2章

【Nコード】

N5972H

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

前作で10年ぶりの再会をし、恋人同士になった峻佑とちひろ、そしてみちると耕太郎。それから1年と少し経ち、高校3年生になった彼らに、それぞれ略奪愛をもくろむ転校生が現れ……！？

01-1 プロローグ(1) (前書き)

前作の完結からずいぶん長いことかかってしまい、いるかどうかわからないですが待つていてくださった方々には申し訳なかつたです。ようやく完成した待望(?)の続編、お楽しみいただけたら幸いです。

なお、ジャンルは前作と同じくコメディにしていますが、このプロローグの間は少々シリアスな展開になっておりますこと、あらかじめご了承ください。

01-1 プロローグ(1)

峻佑とちひろが交際を始めて1年半、みちると耕太郎が交際を始めてから1年と3ヶ月が過ぎ、季節は再び春を迎えようとしていた。「じゃあ、行ってくるから、2泊3日の間、家のことは頼むぞ」

峻佑の父、優佑ゆうすけが玄関で見送る峻佑に言った。今日から優佑と妻の絵美えみは、2泊3日の予定で温泉旅行に出かけるのだ。と言うのも、しよっちゅう出張を言い渡される2人に、久々のまとまった休みが取れたので、峻佑が「じゃあ、たまの休みなんだし、2人でゆつくり温泉でも入ってきたら？」と言ったのをきっかけに、トントン拍子に話は進み、こうして2人で出かけることになった。

「ああ、父さんたちがいないのは出張で慣れてるから何の問題もないよ。父さんたちこそ、気をつけて行って来いよな」

峻佑は心配無用だ、と言うような表情で頷いた。

「そうよね、私たちがいない間にお隣のちひろちゃんとしっかり深い仲になってるんだもの。確かに私は“どっちでもいいから関係を進展させておくように”って書き置きを残したことはあるけど、ホントにやるなんて思わなかったわよ」

絵美は喜んでるのか呆れてるのか、どっちとも取れるような複雑な表情で言った。

「ひどいな、母さん。オレだって、やるときはやるよ。っと、話がそれたな。とにかく、家のことは大丈夫だから、心配はいらない。ほらほら、早くいかないと道が混雑するよ。向こうで観光もしてるんでしょ？ 日が暮れる前に向こう着かないと、大変なんじゃないの？」

峻佑は真つ赤な顔になりながら言うと、2人の背中を押すようにして車へ誘導した。

「そつだな。それじゃ、行ってくる。絵美、行くよ」

「ええ、あなた。じゃあ、私たちがいないからって、ハメを外し過

「ぎちゃダメよ」

優佑は頷くと車に乗り込み、エンジンをかけてから、窓を開けて絵美に早く乗るよう促し、絵美はその声に頷いて車に乗り込んでから、窓越しに峻佑にそう声をかけた。

「なっ——！？」

峻佑は反論しようとするが、言葉を発する前に車は走り去って行ってしまった。

「ったく……言いたい放題言いやがって……」

峻佑は不機嫌そうに悪態をつくとき、家の中に戻っていった。

優佑が運転する車は、しばらくして高速道路へ入り、一路北へ向かっていた。目的地は日光・鬼怒川温泉。多少道は混雑していたものの、ほぼスムーズに走れていた。

「2人で温泉なんて、新婚旅行の時以来じゃない？」

助手席から、絵美が優佑に話しかけた。

「そういえばそうだな。でも、月日の経つのは早いね。ついこないだ峻佑が生まれたと思ってたら、もう高校3年生になって、来年は受験だもんな」

優佑は頷くと、遠い目をして思い出に浸っていた。もちろん、前はちゃんと見ていたが。

「ええ、本当にね。しっかりした子に育ってくれて嬉しいわ」

絵美も留守番をしている峻佑の事を思い、頬をゆるませていた。

と、車が栃木県内のインターチェンジを過ぎたあたりで、優佑が異変に気づいた。

「あれ、おかしい……ブレーキが利かない！？」

優佑が青ざめた顔で叫んだ。一度休憩しようとパーキングエリアに寄るために、少し速度を落とそうとしたのだが、ブレーキを踏んでも「スカッ」という空振りのような異音がするだけで、速度は全く落ちなかった。

「あ、あなた。と、とりあえず路肩に寄った方が……」

絵美も動揺し、声を上ずらせながら優佑に言った。

「あ、ああ……」

優佑は車を走行車線から通常は走行が禁止されている路肩に寄せ、ギアを¹に入れた上でハザードランプをつけて、エンジンブレーキで速度を落とそうとした。

「パーキングまであと2キロか。絵美、シートベルトはしているな？ このまま路肩を走り続ければ、パーキングの入口部分で他の車と衝突する恐れがある。だから、もしそれまでに止まれそうになかったら、最後の手段として、壁にぶつけてでも止める。シートベルトとエアバッグがあるこの車なら、ある程度の衝撃には耐えられるはずだけど、一応、最悪のケースを覚悟しておいてくれ」

優佑は震える声で絵美に告げた。

「え、ええ……わかったわ、あなた。私はあなたを信じる」

絵美はシートベルトを握りしめ、優佑に頷いてみせた。パーキングまであと1キロ。幸い、周りに車はいない。どうやら、空いてきたらしい。しかし、逆に車にとっては危機が迫っていた。

「んなっ!？」

バン、と何かが弾けるような音とともに、車がスピンし、運転していた優佑が驚いて叫んだ。スピンした車は激しく回転したあと、目前に迫っていたパーキングの入口部分のポールに激突して停止した。

「う……」

激突の際、横からポールにぶつかったことで、2人とも窓ガラスに激しく頭をぶつけ、意識を失ってしまった。

01-2 プロローグ(2)

そのころ、峻佑は家でちひろとみちるとともに、夕飯の支度をしていた。と、電話が鳴り響いたので、峻佑が廊下に走った。

「はい、市原ですが。……ええ、市原優佑は確かに父です。あの、恐れ入りますがどなたでしょうか？」

峻佑は見たことのない番号だったのでとりあえず出てみると、いきなり市原優佑さんは父親で間違いないですか、と訊いてきたので、頷いてから相手に名前を訊ねると、

『あ、これは失礼。私、宇都宮警察の町田と申します。実はですね、つい先ほど、優佑さんの運転する車が事故に遭って、優佑さんと同乗されていた絵美さんが意識不明の状態で病院へ搬送されました。かなり危険な状態なので、なるべく早く、宇都宮総合病院へいらしていただきたいのです。もしも、聞いてますか？』

まさかの事故の知らせに、峻佑は立ちつくしていたが、なんとか落ちつきを取り戻し、わかった、と震える声で言うと、電話を置いて台所に戻った。

「峻佑くん、どうしたの？ 顔が真っ青だよ？」

ちひろが振り向いて、峻佑に訊ねた。

「いま、警察から電話が……父さんたちが事故に遭った……。しかも、かなり危険な状態だから、すぐ宇都宮まで来てくれ、って……」
峻佑が途切れ途切れながらも電話の内容を伝え、2人もまたショックを受けていた。

「と、とにかく行かなくちゃ！ 料理なんかしてる場合じゃないよ！」

みちるは叫ぶと、エプロンを脱ぎすて、ちひろとともに着替えるために隣の自宅へ駆けて行った。

人目につかないよう、駅前の寂れた駐輪場付近までテレポートで移動し、電車で1時間以上かけて宇都宮まで行き、宇都宮駅からはタクシーを使って電話で言われた宇都宮総合病院へとやってきた峻佑たち。受付で訊ねると、3階の集中治療室にいたと言われ、3人は息が上がってるのも厭わず、そこへ向けて駆けていった。

「市原優佑さんと絵美さんのご家族ですか？」

集中治療室の前には、医者が待っていて、息も絶え絶えに駆けってきた3人に、そう訊ねた。

「は、はい……長男の峻佑です。父さんたちは……!?」

峻佑は乱れた息を整えるよりも早く、医者に掴みかからん勢いで問いかけていた。

「我々としては最善を尽くしましたが、残念ながら絵美さんは先ほどお亡くなりになりました……。優佑さんも依然として危篤状態です。後は、本人の生命力に賭けるしかない状態です」

その言葉に峻佑が治療室の中を覗き込むと、ベッドが2つ並んでいて、片方のベッドに寝かされている人の顔に白い布がかけられていた。もうひとつ、まだ治療が続いている優佑の方も、脈拍は弱く、また頭を中心にあちこち血の痕があった。

「なんでこんなことに……」

あまりの凄惨さに目をそらし、そうつぶやいた峻佑。と、そのとき。優佑の脈拍が急激に弱まり、室内に緊張が走った。

医師や看護師たちの懸命な治療も実らず、優佑は翌朝、帰らぬ人となった。

警察が事故を調べたところ、車のブレーキパッドに重大な欠陥が見つかり、責任が追及された結果、峻佑のもとには車のメーカーから賠償金が支払われることになった。なお、タイヤの破裂に関しては、空気圧の不足による偶発的な事故と断定された。

さらに、優佑は峻佑を受取人に自らに生命保険をかけていて、その支払いで、優佑の兄で、峻佑から見れば伯父にあたる優太^{ゆうた}を代理

人に家のローンを完済することができたが、葬儀を終えて1週間が過ぎても、峻佑は部屋に閉じこもったまま出てこない日々が続いていた。一応、姉妹が彼の部屋まで運んでいる食事には手をつけている形跡があるので健康面では問題なさそうだったが、2人の心労もピークに達しようとしていた。

「ふう……姉さん、どうしたら峻佑くんは以前^{まえ}みたいに元気になつてくれるのかな？」

優佑たちの葬儀を終えてから10日ほどが過ぎ、未だに峻佑は部屋から出てこないまま。姉妹は峻佑の部屋に運んだ夕飯の皿を下げに行き、皿に手をかけたところでみちるがポツリとつぶやいた。

「そうね……もうすぐ新学期も始まるし、いつまでも塞ぎこまれてたら、おじ様やおば様も浮かばれないわ。なんとかしないと、ね。後で、話してみるわ」

ちひろは皿を持って階段を下りながら、そうみちるに話した。

「うん、お願いね。峻佑くんのことなら、今は私より姉さんのほうがよくわかってるはずだし……。コーくんも彼なりに心配してるみたいだから」

居間に下りてきて、皿を洗いながら、2人は微笑み合った。

01-3 プロローグ(3)

その日の夜遅く、ちひろは峻佑の部屋を訪ねていた。

「峻佑くん、まだ起きてる？」

扉をノックして、少し開けながら呼びかけると、

「……ああ。一応、起きてるよ」

峻佑は部屋のカーテンを閉め切り、電気をつけないで暗い部屋のベッドの上でうずくまり、顔だけを上げてちひろに応えた。

「峻佑くん、いつまでそうしているつもり？ おじ様やおば様が亡くなったのはあたしやみちるだって悲しいし、息子である峻佑くんが悲しいのも、完全に理解することは難しいけど、ある程度は察するわ。でも、そうしてたって何か変わるわけじゃないのよ？ 遺された峻佑くんができるのは、2人の分まで前を向いて生きていくことだけ。下を向いていたって2人は還ってこないんだから」

ちひろは部屋の電気をつけて明るくすると、そのまま峻佑に歩み寄り、まくしたてるように言い放った。すると、

「なあ、ちひろ……魔法って万能じゃないんだな」

峻佑はそれに答えるでもなく、ポツリとそう呟いた。

「どうしたの、急に……？ ご先祖様の幽霊を宿してから1年半以上、ほとんど使おうともしなかったのに」

ちひろは峻佑の呟きに驚いた。峻佑は1年半ほど前のとある事件を機に真野家の始祖であるジェン＝マノールの幽体を宿したまま暮らしていて、彼の魔力のおかげでちひろやみちるには劣るものの、ある程度の魔法を扱えるようになっていたのだが、これまでほとんど使わずに過ごしていて、時々ジェンが《退屈だ》などと言って幽体として出てくることがあるほど使ってなかったのに、ここへきて急にそんなことを言い出したのだ。驚かない方がおかしい。

「オレは、さ……高校入学時に2人と再会して魔法使いの存在を知った時から、魔法は万能のチカラだと信じて疑わなかった。でも、

本当は万能どころかすごく無力なんだな。万能なら、父さんたちを救えたかもしれないのに……」

峻佑は涙を流しながらベッドを拳で殴りつけた。

「峻佑くん、それが普通なのよ。いくら魔法でも、人の命まではどうにもならないの。だって、もしも魔法で人を生き返らせることができたとしたら、世界の常識が狂ってしまうわ。ましてや真野家の始祖であるご先祖様はフランスの生まれ。ヨーロッパはキリスト教が大半を占めているから、そういうのには特に厳しいはず。そんな中で、死んだ人を生き返らせるとか、そんな魔法が生み出されると思う？」

ちひろはベッドに腰かけて峻佑と同じ目線になると、諭すように話した。と、そのとき。

「チヒロの言う通りだ、シユンスケ。俺たち魔法使いは、ケガを治すことはできても失われた命は取り戻せない。遺された者がいつまでも悲しんでいては、2人の魂はいつまでもこの世をさまようことになる、最悪の場合人に害を与える悪霊と化してしまうこともある。お前は自分の両親がそんなことになってもいいというのか？ そうなっても構わないと言うのであれば、好きなだけそうしてるといい。ここ数日、峻佑から離れて幽体として過ごしていたジェンが現れて、峻佑を説得しようとした。」

「ああ……ちひろやジェンさんの言いたいことはわかってるんだけど、まだ気持ちの整理がつかないんだよ。父さんたちとの最期の会話があんなだったこととか、オレが勧めた旅行へ行く途中で事故に遭ってしまったこととか、悔やんでも悔やみきれないことばかりだ」

峻佑は顔を上げて、泣きはらした顔でそう話した。

「そう……もし、2人と話せたら、後悔も解消できるかしら？」

ちひろが何の脈絡もなく、峻佑に訊ねると、

「確証はないけど、少しはスッキリするんじゃないかと思う。もしかして、できるの？」

峻佑は首を傾げつつも、ちひろの問いに答えてから、逆に訊ねた。
「ええ、正確にはあたしが、じゃなくてご先祖様が、けどね」
ちひろは頷いたが、そう付け加えて一歩下がった。峻佑がジェン
の方をみやると、

《まあ、コイツは魔法とはあまり関係ない、俺が幽霊だからこそ
芸当だ。2人の魂を連れてくるから、ちよつと待っててくれい》
ジェンはフン、と鼻を鳴らして薄く笑うと、姿を消した。

01-4 プロローグ(4)

《待たせたな》

しばらくして、ジエンが戻ってきた。その背後には、はつきりとは見えないが何かもやのようなものが漂っていた。

「ああ、お帰りなさい、ジエンさん。その後ろに漂ってるモノが父さんたちなの？」

峻佑が訊ねると、

《ああ、そうだ。あとは魔法で一時的に生前の姿にするわけだが、チヒロ、ちよつと身体借りるぞ》

ジエンは頷くとちひろの身体と同化して、空間を漂う2人の魂に魔法をかけた。ここで峻佑の身体を使わなかったのは、彼なりの配慮らしかった。

「父さん、母さん……」

柔らかな光が2つの魂を包み、優佑と絵美の姿になっていくと同時に、峻佑はただそう呟いた。

『峻佑、せめてお前が成人するまでは親として見届けたかったが、こんなことになっちまって済まない。だけど、今回の事故でお前と一緒に旅行に行ってなくて、本当に良かった。もし、今回の旅行が夫婦水入らずじゃなく、家族旅行という形でお前も一緒に連れて行って事故に巻き込んでいたら、俺は永遠に悔やみ続けたかもしれないから』

優佑は峻佑を遣して自分たちが死んでしまったことを彼に詫びた。
「そんな、オレが父さんたちに旅行を勧めなければこんなことには……！」

峻佑は首を振って優佑の発言を否定する。

『いや、今回の事故は車の欠陥と、タイヤの空気圧が不足、つまり俺の整備不良が原因で起こったことだから、お前が旅行を勧めなくとも、俺が車に乗った時にどこかで起こっていただろう。だから、

事故のことでお前が気に病む必要はないんだ』

優佑は幽霊としてさまよってる時に事故の原因をどこかで聞いたのか、ゆっくりと首を振ると、峻佑にそう告げた。

『そのとおりよ、峻佑。今回の事故で私たちは不幸にも死んでしまったけど、ジェンさんの魔法、っていうもののおかげで、こうして少しだけとはいえあなたと話をすることができた。私たちの葬儀が終わってから、時々そばで様子を見ていたけど、いつまでも悲しんでいてはダメよ、峻佑。あなたには、守るべき女性ひとがいるんだから。絵美はジェンの正体なども本人から聞いていたらしく、峻佑に微笑みながら話すと、2人の姿が次第に薄くなっていた。』

「母さん……！？ 父さんも……！ 待って、まだ行かないでくれ！」

峻佑は驚いて2人を引きとめようとするが、無情にも姿はどんどん薄れていく。

『どうやらもう時間のようだ。俺たちは行かなくてはならない。峻佑、俺はお前にほとんど親らしいことをしてやれなかったけど、素直に育ってくれて感謝してる。そんなダメな親父を亡くしたことをいつまでも気にかけるな。お前にはまだ未来がある。後ろを向かず、前を向いて生きていくんだ。じゃあな、峻佑。俺たちはいつもお前を見ているからな——』

優佑は姿が薄れゆく中、峻佑に最期の想いを伝え、2人の姿は見えなくなった。もやしきものも見えないので、どうやら魂も天国へ向かったらしい。

部屋の中を静寂が包む。やがて、峻佑が口を開いた。

「行っちゃった、か……。まだ話し足りないけれど、少しはスッキリできたかな。ジェンさん、ありがとうございました。ちひろと、今ここにいないみちるも、心配かけてゴメン。でさ、悪いんだけど、今夜だけ1人にさせてくれないかな？ 明日には、きっといつものオレに戻れると思うから、さ……」

その言葉にちひろは頷くと部屋を出て行き、ジェンは《散歩して

くる』とだけ言い残して窓から外へ飛び出していった。

その日の夜の間、峻佑の部屋からは彼の嗚咽の音が絶えることなく響いていた――

4月7日、水曜日。短い春休みも終わり、峻佑たちは今日から高校3年生になる。

「峻佑くん、朝だよ。今日から学校始まるから起きないと遅刻するよ」

ちひろが峻佑の部屋の扉をノックして呼びかけるが、例によって反応がない。

峻佑が両親を亡くしたあの事故からおよそ1ヶ月。ショックで2年生の終業式まで引きこもっていた峻佑だが、ちひろとみちる、それとジェンのおかげでどうにか立ち直れていた。

「もう、峻佑くん！ 入るわよ！」

そう言いながらドアを開けたちひろの目に映ったものは――上半身裸の峻佑だった。

「きゃっ！ お、起きてるなら起きてるって言ってよ！」

一瞬とはいえちひろはしっかり峻佑の裸を見てしまい、顔を真っ赤にさせてくるつと後ろを向いた。

「あはは、寝起き“逆”ドッキリ成功」。これは裸に見せかけた肌色のボディースーツだよ。今まではたまにオレが早く起きたときに2人を起こしに行くのと驚かされてばかりだったから、1回はやってみ――」

「ふうん、寝起き逆ドッキリ、ねえ……」

ちひろは笑っている峻佑の言葉を遮るようにポツリとつぶやくと、ゆっくりと再び峻佑のほうを向いた。その手に、魔法で作り出した光るモノを携えて。

「って、あれ？ ちひろ、その手に光るモノはなに……？」

峻佑は笑うのをやめて1歩後ずさるが、ちひろは1歩前進して2人の距離を一定に保つ。

「せっかく起こしに来てあげたのに、何考えてんのよっ！ 天誅――」

「っ！」

ちひろは叫ぶと、手に携えていた光るモノ——雷球を天井に向けて投げつけた。投げられた雷球は峻佑の頭上で止まると、激しい音と光を放ちながら峻佑の頭に雷を落とした。

「ぎゃあああああ！」

峻佑はとつさに障壁を張ろうとしたが、その反応速度すら上回る速さで落とされた雷に貫かれ、悲鳴を上げた。普通は雷に打たれれば即死ないしは重傷になるだろうが、魔法の雷なので、殺傷力はコントロールできるらしく、威力は気絶しない程度に抑えていた。もちろん、それでも雷なので痛いものは痛いのだが、気を失うほどではないので、峻佑は痛みと戦いながら、ちひろをからかったことを後悔していた。

数分後、様子を見に来たみちるが止めに入り、事なきを得たが、峻佑が着ていたボディースーツは黒コゲになって、あちこち破れてしまっていた。

「いてて……ちょっと調子に乗りすぎたか」

登校の途中、峻佑はまだ痛むのかうめき声をあげた。

「まったく、自業自得だよ。あんな手の込んだイタズラ仕込むなんて……。でも、あそこまで精巧なボディースーツ、どこで手に入れたの？」

ちひろは呆れたように言うと、峻佑に訊ねた。

「ん？ 父さんの遺品から出てきたんだよ。たぶん、そこにあった写真から察するに、父さんが学生時代に使ったものじゃないかな？」

峻佑が両親の死から立ち直り、両親の部屋で2人の遺品を整理していた時に、そのスーツを見つけたらしい。また、部屋の棚に入っていたアルバムには、優佑がそれを着てステージに立っている写真が残っていた。写真の横にあった走り書きには、“優佑 高校3年文化祭にて”と記されていた。

「そうなんだ……。今朝の騒動で結構破れちゃったけど、直せるかな？ おじさまの遺品なら、残しておいた方が……」

ちひろがそうつぶやいた。直接破いたわけではないが、ちひろの魔法で破れたことは確かなので、後ろめたさを感じているらしい。

「いいよ、直さなくて。写真の内容からしてさほど思い入れのある品ってわけでもなさそうだし」

峻佑はあっけらかんと言いつつ放った。

「よう、峻佑。その様子なら、もう心配はいらないんだな？」

そこへ後ろから耕太郎が自転車で走ってきて合流した。

「おう、コータロー。心配かけて済まん。もう大丈夫だ。ところでお前、去年も一昨年も最初だけ遅刻なしで頑張ってたけど、2年連続で5月のゴールデンウィーク終わると同時に遅刻魔に戻ってたんだろ？ 3年連続で同じことを繰り返すのか？」

峻佑は耕太郎に心配をかけたことを謝ると、話を変えて耕太郎に訊ねた。

「ああ、去年も結局ダメだったんだよな。今年こそはちゃんとしな」と、内申とかにも響くだろうしな。一応、俺も進学するつもりでいるし」

耕太郎は自身の生活を改める意欲はあるが、うまく行っていないことに危機感だけはあるらしかった。

「コーくんも進学希望なの？ 志望大学とかもう決めた？」

付き合いだしてから耕太郎を「コーくん」と呼ぶようになったみちるが耕太郎の“進学”という単語に反応して彼に訊ねた。

「んー、うちから通える範囲で、今の俺の学力で行けるとこって言ったら、明正大^{めいしょうだい}くらいしかないだろうな。2駅しか離れてないから余裕で通えるし」

耕太郎は少し考えるそぶりをしてから、彼らにとって一番近くにある大学の名前を挙げた。

「じゃあ、私もそこに行く。コーくん、一緒に勉強して2人で合格しようね」

みちるは何のためらいもなく自分も明正大に行くと言い放った。

「えっ？ 正気か、みちる。明正大はみちるの成績からしたらかなりランク落ちるだろ？ みちるだったら、武蔵文理むさしぶんりとか狙えるはずだろうに」

耕太郎は驚いて聞き返した。2ヶ月ほど前に行われた模試で、みちるは偏差値60、耕太郎は偏差値43という判定が出ていた。明正大は偏差値42と耕太郎にとってはちょうどいいレベルだが、みちるが行くには低いのは確かである。ちなみに耕太郎が引き合いに出した武蔵文理大学は偏差値58でみちるにちょうどよく、なおかつ彼らの住む竹崎からは電車で明正大とは逆方向へ4駅という、それなりに近い場所にある大学である。

「もっ……コークン、私たち付き合って1年以上経つんだから、わかってよね。成績なんてどうでもいいの。私は耕太郎くんと一緒にいたいんだから」

みちるは鈍い耕太郎の胸をコツンと叩きながら言った。

「いや……でもよう……そうか、逆にすればいいんだ！ オレがこれから猛勉強して武蔵文理を目指せば何の問題もないな。なあ、そうだろ？」

なおも渋る耕太郎だったが、何かいい案が浮かんだのか、急に叫ぶと、目を輝かせて3人に話した。だが、これには3人とも驚くほかなかった。

「いや、オマエ簡単に言うけど、武蔵文理は厳しいだろ……」

「仮にこれから猛勉強して成績はカバーできて、沢田くんは遅刻魔っていう内申のマイナスがあるから、かなり厳しい戦いになると思うわよ？」

「そうだよ、そんな無茶なことしないで、私が明正大に進学すれば万事オツケーじゃない。私のために無理なんてしないで」

三者三様の言い回しではあったが、全員耕太郎の武蔵文理志望を止める気持ちは一緒だった。

「うわ、俺の一大決心を3人そろって否定するか。わかった、じゃ

あ確か近いうちに模試があったよな。その結果で最終的に決める。俺は志望大学に武蔵文理と明正の2つを入れておく。武蔵文理の判定が下層のCやDだったらもう間に合わないと素直に認めて諦める。それでどうだ？」

普段の耕太郎らしくない、自信にあふれた物言いにもはや3人は何も返せず、無言で頷くと、その後は無言のまま学校へ向かうのだった。

03 - 1 出会は唐突に（前）

「お、今年はオレとちひろ、それとコータローとみちるが一緒のクラスか」

学校に到着し、新学年のクラス分けの掲示板を見に来た峻佑たちは、貼りだされた紙を見ると、後ろを振り返ってそう話した。峻佑が言ったとおり、峻佑・ちひろの2人が3年2組、耕太郎・みちるが3年3組だった。

「まあ、双子は同じクラスにはならないのが普通だから、それを考えたら最高の分かれ方じゃない？ ほら、新しい教室行こ？」

ちひろはそう言って微笑むと、峻佑たちを促して昇降口のほうへ歩いていった。

「えー、であるからして、生徒の皆さんには――」

始業式の恒例行事、校長の長話。入学式は午後からのため、この場には2年生と3年生しかいないが、すでに半分近い数が立つたまま寝ていた。

（だいい……）

峻佑も例外ではなく、すでにまぶたは閉じかけ、足元がおぼつかなくなっていた。

「――校長先生、ありがとうございます。では、ここで転入生を紹介します」

どうやらやっと校長の長話が終わったらしく、進行役の教頭が式を先に進める過程で、転入生を紹介すると言った瞬間、“転入生”という単語に何かを察知したのか、寝ていた生徒の大半が目覚ましてステージ上に注目が集まった。

「では、紹介します。3人は、ステージに出てきてください」

教頭の言葉とともにステージの袖から出てきたのは、男子1人と

女子2人。女子の2人は顔がそっくりなので、双子のようだった。

「では、それぞれ自己紹介を。まずは、九崎くんから」

教頭がそう言って九崎と呼んだ男子にマイクを渡した。

「えー、今日からこの学校に転入してきました、九崎 翼（きよく）です。クラスは3年2組になります。皆さん、よろしくお願いします。あ、最後にひとつ――」

翼と名乗った男子はそこで一呼吸置くと、マイクに向かって叫んだ。

「この学校にいるはずの真野ちひろさん！ 僕と付き合ってくださいー！ ……以上です。ありがとうございました」

まさかの告白に全員がド肝を抜かれたが、中でも一番驚いたのは、名指して告白されたちひろと、ちひろの彼氏である峻佑だった。

「な、なに？ 今の……」

体育館が騒然とする中、峻佑はちひろにメールを送って訊ねてみた。だが、

「知らないわよ……。むしろあたしが訊きたいくらいよ」

ちひろもやはり戸惑いを隠せない様子だった。

「あー、ゴホン。気を取り直して、次。姫野渚さんと栞さん」

教頭が咳払いをして生徒たちを黙らせると、次の女子にマイクを渡した。

「はい。初めまして、皆さん。本日よりこの学校にお世話になります、姫野 渚（はるの）と申します。クラスは3年2組になりますので、よろしく願いますね」

渚と名乗った女の子はごく普通に挨拶を終えると、隣にいたもう1人にマイクを渡した。

「初めまして、皆さん。双子の姉、渚とともに転入してきました、姫野 栞（しお）です。クラスは3年3組ですので、どうぞよろしく願います」

栞が挨拶を終えると、3年生8クラスのうち、2組と3組からは歓声が上がリ、逆にそれ以外のクラスからは「えー」や「あーあ」

などのため息が漏れていたが、これは仕方ないだろう。2組と3組にはすでに解散したとはいえ1年生にして校内に非公認ファンクラブのあった真野姉妹がいる上に、女子受けしそうな翼、さらにはこれまた美人の双子、姫野姉妹も2組と3組に割り当てられたのだから。

「えー、ではこれにて始業式を終わります。各自教室に戻り、新任の先生とホームルームを行って下校してください」

生徒たちのため息などどこ吹く風で教頭が式の終了を告げると、3年生は明暗がはっきり分かれた表情でそれぞれ体育館を出ていった。

03 - 2 出会は唐突に（後）

「藍沢センセー、今年のクラス分けどうなってるんですかー？ 2組と3組だけなんであんなに優遇されてるんですかー」

3年4組の教室では、4組の担任になったさとみに、川原が詰め寄っていた。かわはら

「あのね、もともと九崎くんは2組に割り当てられていたのよ。残る姫野姉妹は、当初姉の渚さんが1組、妹の栞さんがこの4組に来る予定だったはずなんだけど、今朝になって学年主任の佐々木先生ささきが渚さんを2組、栞さんを3組に変更するとおっしゃって来たの。理由はわからないわ。その関係で、最初2組と3組に入る予定だった子が1組と4組に移動したり、多少変更があったのよ。だから、このクラス分けで不服とかがあるのであれば、佐々木先生に聞いてみるといういわ」

さとみは冷静に追及をかわすため、それぞれの理由を川原や他の生徒たちにも話した。

「ふーん、そうなんですか。（佐々木のヤロー、なに考えてやがる……）」

川原は表向き納得したような顔で言ったが、その内面では学年主任の佐々木への怒りがこみあげていた。

「あ、ホームルーム始まる前にちよつと便所行ってくるわ」

峻佑はそう言って教室を出た。トイレへ向かう途中、廊下の角を曲がった、そのとき。

「きゃっ！」

「うおっ！」

女の子が声を上げた瞬間には、もう2人は衝突して、お互い転んでしまっていた。

「すまん、大丈夫か？」

峻佑がすぐに起き上がり、起きあがろうとしている女の子に謝りながら手を貸そうと手を差し出した。

「ええ、大丈夫です。すみません、よそ見していたせいでぶつかってしまつて……」

女の子はその手を取ると、ゆっくりと起き上がつて、軽く制服をはたいてホコリを落とした。

「大丈夫ならいいんだけど、オレも便所に行こうとして焦つてたからな。じゃあ、急ぐからまたな、転入生」

峻佑はぶつかった相手がさつき見た転入生の双子の姉妹の片割れなことに気づき、片手を上げてそう声をかけると、早歩きでトイレへ向かった。

「ふう……」

用を足し、ホツとしたように大きく息をつきながらトイレから出ると、ちょうどチャイムが鳴り、新担任の脇野が通りかかった。

「ん、市原か。チャイム鳴つたぞ」

峻佑が1年生だったときはまだ着任2年目のペーパーだった脇野も、あれから2年が過ぎて4年目を迎えた今では、それなりの貫禄が出てきており、トイレを済ませてホツとしてる峻佑にそう声をかけると、そのまま教室の方へ歩いていった。

「はい、わかつてますよ。脇野先生」
ワッキー

峻佑は脇野をニツクネームで呼びながら、その隣に並んだ。

「市原……仮にも教師に向かつてそうやってニツクネームで呼ぶのは……」

脇野はこめかみを押さえながら峻佑に注意したが、

「ええー、その方が親しみやすくもいいじゃないですか。それに、こうやってニツクネームで呼ばれて親近感持たれた方が、先生にとってもいいと思いますよ？ 知ってるんですよ、先生がなんで高校の教師の道を選んだのか、以前オレたちに話してくれた理由の裏に隠された本当の理由を……」

峻佑は抗議の声を上げると、急に声をひそめて脇野に耳打ちした。
「な、何の話をしている？ 私が教師になった理由は以前も話したが、私が高校生だったときに素晴らしい先生と出会って、“あの人のような教師になりたい” っていうのがすべてだ、裏も表もない」
脇野は平静さを装ってはいたが、僅かに声が上がらず、視線は右に左に忙しく動いている。見る人が見れば、確実に嘘をついていると見破るだろう。

「へえ？ じゃあ、言っちゃっていいんですね？ 先生が教職を目指した本当の理由、それは……昔の学園ドラマのように、女子生徒に人気のある先生になって、あわよくば……でしょう？ どうです、否定できますか？」

峻佑は脇野をニックネームで呼ぶためだけに、どこかで握った脇野の秘密をネタに脅迫していた。

「い、市原……お前、どこでそれを……」

脇野は動揺を隠しきれず、自分から真実と認めてしまうような返し方をしてしまった。

「いえ、全くの偶然なんですよ？ 2年生の終わりごろ、階段を下りていたら、先生と誰かが1階の階段の陰でひそひそ話をしているのが聞こえてきまして、いったいそんな場所で何をしているのか気になって、階段に座り込んでちょこつと立ち聞きしてたんですよ。そしたら、そんな話が聞こえてくるんですもの、驚いちゃいましたよ」

峻佑は先ほどまでの腹黒そうな表情をすっかり隠し、笑顔でそう話した。

「誰もいないと思って油断してたのが運の尽きか……まあ、仕方ない。で、市原。何が望みだ？ この件は内密に頼みたい。その代わりと言ってはなんだが、金銭以外なら要求に応えようじゃないか」

脇野は秘密を守るため、峻佑に取引を持ちかけてきた。

「さすがに話が早い。まあ、オレが要求したいのはただ1点。先生のニックネームを公式に認めてくれればそれでいいです。金銭を要

求したりしたら犯罪ですからね。オレはまだ犯罪者になりたくはないですし」

峻佑はニヤリと笑うと、脇野への要求を伝えた。単に脇野をワツキー、と呼ぶことを認めろ、それだけなのだが。

「それぐらいでいいなら好きにするといい。おっと、いかん。ほら、ホームルーム行くぞ」

脇野は頷くと、さっと時計を見て、峻佑を促すと早歩きで教室へ向かうのだった。

04 - 1 複雑な人間関係（前）（前書き）

またも更新が滞り申し訳ありませんでした。

あと、この場を借りてもうひとつお詫びを。

03 - 2の回において、物語内で非常に重要な事柄の書き間違いがあったので、修正を行いました。特に見直す必要があるとまでは言いませんが、この先はその修正後に準じて書かれておりますので、ご了承ください。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

04 - 1 複雑な人間関係（前）

「はて……おかしいな。確か転校生は1組、2組、4組に割り振ったはずだったんだが……」

学年主任の佐々木が始業式のあと急いで職員室に戻り、書類を確認すると、書類には確かに1組に渚、2組に翼、4組に栞を編入と書いてあったが、なぜかそれが赤線で消され、3組に栞、2組に翼と渚を編入させるよう訂正されていた。

「どうしたんですか、佐々木先生。ああ、転校生の件ですか？ それなら、佐々木先生ご自身でそういう風にされたんじゃないですか。まだ、ボケるようなお年じゃないでしょう。もう50代後半の私と違って、佐々木先生は私より一回りも若いんですから」

通りかかった2年生の学年主任、川口かわぐちが笑いながら言った。

「まあ、決まっちゃったものは仕方ない、か。それにしても、こんなことは初めてだ……」

川口に励まされても、佐々木はひとり首をひねっていた。

「と、いうわけで、転入生の九崎くんと姫野さんだ。2人とも、改めて自己紹介を」

3年2組のホームルーム。先ほど峻佑に脅迫されて焦るという、教師らしくない一面を見せた脇野だったが、教室に入ってから普段通りの表情に戻って、自分のクラスに割り当てられた転入生を2人紹介していた。

（それにしても、3年生は8クラスもあるのに、なぜ2組と3組に集中したんだ？ 確か先日、主任の佐々木先生が1、2、4組にそ

れぞれ割り振るとか言ってた気がするんだが……。まあ、私の知ったことではないな。生徒たちの高校生活最後の1年、すっかり面倒見て送り出してやるとしよう)

脇野が考え事をしている横で、転入生2人の自己紹介が始まっていた。

「改めて、今日から転入してきた、九崎 翼です。この場で僕から言いたいことはたったひとつです」

翼は改めて自己紹介し、そう告げると、タン、という軽快な音を立てて教壇を蹴って高くジャンプした。だが、教室の天井はあまり高くはない。必然的に、——ゴン！ という大きな音とともに翼は天井に頭をぶつけたが、それでもシュタツ、ときつちり着地を決めた先は——

「へ？」

突然のことに頭が追い付いていない、ちひろが座る席の前だった。頭にタンコブを作りながらも翼はちひろの手を握ると、

「真野……ちひろさんですね？ 先ほどの告白の返事、考えていただけたかな？」

おそらく本人としてはカッコよく決めたつもりだったのだろうが、頭のタンコブがシュールすぎて、周囲は唖然とするか、クスクスと笑いを必死にこらえるかのどちらかだった。一方、ちひろは——

「九崎……翼？ 間違ってたらゴメンナサイ。もしかして……小5と小6の2年間だけクラスメートだった、あの九崎くん？」

ちひろは必死に頭の中を整理し、昔そんな名前の、転入してきたクラスメートだったかとも思い、訊いてみた。

「そう、その九崎です。小学校を卒業したあと、また遠くの街に転校していた僕だけど、またこうして竹崎に帰ってこれて、そしてちひろさんと再会できて本当に嬉しい。いつか再会できたら、一番にあなたに告白しようと思ってたんだ。いま一度言つよ、僕はキミのことが好きだ。片時もキミから離れない、キミだけの騎士^{ナイト}になる^{プリンセス}と誓う。ちひろさん、僕だけの姫になつてくれますか？」

翼の芝居じみたクサイ言い回しの告白に、全員がため息をついた、その時。

「おい、九崎とか言ったか。アツい告白をしているところ悪いが、ちひろはオレと付きあってたんだよ。もう2年近く付き合ってるオレらの間に入り込める隙間なんてねえからすっこんでな」

隣の席で黙って聞いていた峻佑が乱入し、手で翼を追い払うようなしぐさを見せながら翼に宣言したのだった。

04 - 2 複雑な人間関係（後）

「なっ……！」

突然の乱入者、峻佑から告げられた事実^に絶句する翼に対し、

「えっと、九崎くん。峻佑くんの言うとおり、あたしは峻佑くんと付き合っているの。だから、翼くんの告白は受け入れられないわ。ゴメンね」

ちひろは援護に入った峻佑の言葉を肯定すると、湿っぽくならないように、笑顔で翼の告白を断った。すると、

「ぼ、僕は諦めない！ シュンスケ、って言ったか？ ちひろさんの彼氏の座、譲ってもらおう！ 今ここに、宣戦布告する！」

告げられた事実^に絶句していたかと思ったら、翼は唐突に峻佑に対し宣戦布告してきた。

「はあ？ お前、何言ってるの？ オレたちは相思相愛のカップルだぜ？ 小学校のクラスメートだかなんだか知らないし、オレたちには幼稚園から高校入学までの10年の空白^{ブランク}があるとはいえ、幼稚園の頃からの幼なじみ、なめんなよ」

峻佑も火がついたのか、ちひろを奪おうとする翼とにらみ合いのような状態になっていた。次の瞬間、それを止めに入っただのは意外な人物だった。

「お待ちなさい！ わたくし、姫野渚もそこに参戦させてもらうわ」
翼の自己紹介から始まったこの騒動の間、ずっと教壇で待ちぼうけ状態だった渚が初めて口を開いたと思ったら、ちひろをめぐる峻佑と翼の争いに参戦する、という宣言だった。

「参戦する、って……ちょっと待ってよ！ あたしそっ……ちの趣味はないわよ！？」

峻佑と翼がにらみ合ってる所に唐突に参戦を宣言した渚に対し、当事者のちひろがもつともな反応をみせた。

「おっと、これはいらぬ誤解を与えてしまいましたね。真野ちひろ

さん、とおっしゃいましたか。大丈夫です。わたくしもそういった趣味はないですから」

渚はちひろに誤解されたと気づき、きちんと誤解だと話した。

「なんだ、良かった……って安心してる場合じゃないわ。じゃあ、いったいどういう意味だったのよ？」

ちひろはホッと一息ついて、改めて渚に問いかけた。

「わたくしが参戦する理由は、あなたですわ」

そう言つて渚が指さした先は――

「お、オレ？」

まぎれもなく市原峻佑、その人であつた。

「そう、あなたです。先ほど廊下でぶつかってしまったときに、わたくしは運命を感じたのです。それなのに、すでにあなたはお付き合ひしてる人がいる……ならば、同じ転入生の九崎くん同様、奪い取るのみですわ！ わたくし姫野渚、峻佑さんをかけて宣戦布告いたします！」

――2組で四角関係戦争が勃発しているころ、隣の3組では……

「栞、あなたに一目ぼれしちゃいました！ 私と付き合ってくださいー！」

3組に転入してきた渚の妹、栞が自己紹介のラストでいきなり耕太郎に告白していた。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。俺、隣にいるみちると付き合ってるから、悪いけどその告白は受けられない」

耕太郎は突然の告白に焦ったが、流されることなくみちるという彼女がいることを理由にきちんと断った。

「ええ？ そんなあ。栞と付き合ってくれたら、イイコトしてあげるのにい」

栞はクネクネと腰を動かし、ペロリと舌舐めずりをしてみせた。

そのしぐさに、耕太郎を除く3組の男子は前かがみになっていた。
「ちよつと、いい加減にしてよね！ コーくんは私と付き合ってるの！ 私たちの絆はそう簡単に壊して奪えるようなものじゃないんだから！」

みちるが立ち上がり、栞に向かって怒鳴りながら睨みつけた。

「栞はね、欲しいものは手に入れないと気が済まない主義なの。耕太郎君、あなたを栞になびかせてみせるわ！」

栞は耕太郎に指をつきつけてそう宣言すると、自己紹介を終えて担任に言われた席に着いた。もつとも、もめ事を嫌った担任が栞に与えた席は、耕太郎とみちるのいる、廊下側最前列から一番遠い、窓側の最後列だったのだが。

——この日転入してきた3人の男女がそれぞれ略奪愛を宣言したことは、あつという間に校内を駆け抜け、全校生徒の知るところになったのだった。

05 - 1 生徒会室にて(前)

「はあ……」

放課後、生徒会室に3つのため息が重なった。

「ん？　なんだ、みちるもため息なんかついて、どうしたんだ？」

峻佑がみちるに訊ねると、

「うん、実は……」

みちるが頷いて事情を話すと、

「あの姉妹、やることまで似てるのかよ……。全く、厄介なことこの上ない」

峻佑はしかめっ面をして頭をかきながら呟いた。

「似てる、って……確か峻佑くんのクラスには姉妹の姉、渚って子が入ったんだよね？　それに、私と同時に姉ちゃんや峻佑くんもため息ついてたけど、そっちでも何か、あったんだ？」

みちるが苦笑しながら逆に訊ねると、

「ああ、もう大変だよ。そっちは三角関係で済んでるけど、こっちはもう1人の転入生、九崎ってのも合わさって四角関係だよ。ホント、やんなっちゃうよ」

生徒会で取り仕切る仕事よりも面倒なものを抱えてしまった、とばかりに峻佑がグチをこぼした。

1年生の春から生徒会に加入した峻佑たちは、その年の秋に行われた信任選挙で峻佑は副会長、ちひろは書記、みちるは会計の役職を経て、2年秋の選挙で今度は峻佑が会長、みちるが副会長、ちひろは引き続き書記を担当し、会計には――

「ちーっす。あ、もう先輩たちみんな来てたんですね」

そう言いながら入ってきたのは、生徒会会計、2年8組の大谷おおたに賢悟けんご。

もともと、峻佑が会長になった段階では1年生の生徒会役員はいなくて、書記のちひろが会計も兼務していたのだが、冬を迎え、3学期が始まったその日に、賢悟が突然生徒会室に現れ、「役員に

なりたい」と言ってきたので、書記が会計どちらが適しているか試したところ、会計の書類整理をあつという間に終えてしまったことから、新会計として賢悟を迎え入れた。そして、現在に至る、というわけだった。

「ん、ああ。オレたちもさつき来たばかりだ、気にすんな。それに、遅れたって怒りやしないって。うちの生徒会はこのユルさがウリなんだから」

峻佑が手をパタパタ振ってもっと気楽にしろ、と賢悟に言っていると、

「そうなんすか。ってか、始業式とその後教室で起こった出来事、全校の噂になつてますけど、なんなんすか、あれ？」

賢悟は納得したようなしてないような微妙な表情をすると、話題を変えて噂の真相を当事者に聞いてみることにした。

「んー、どこから説明するか…… そうだな、まず、オレとちひろ、それにみちると生徒会メンバーではないけどオレらの親友、耕太郎ってのが正式に付き合ってる。ここまではいいな？ で、今日転入してきた3人のうち、九崎ってのはちひろやみちるが小学校時代にクラスメートだったらしい。だよな？」

峻佑が賢悟にひとつひとつ噛み砕いて話していきながら確認すると、2人は頷き、賢悟も「わかりました」とだけ言つて、続きを促した。

「で、あとの2人、双子の姫野姉妹。姉の渚は——」

峻佑が姫野姉妹について話そうとしたところで、

「はあい、呼んだ？」

いつの間に生徒会室のドアを開けたのか、入口のところに姉妹がそろって立っていた。

「うわっ！ いたの？ よく迷わず来れたね…… って、そうじゃないな。ここは生徒会室だから、基本的に生徒会関係者以外立ち入り禁止なんだけど」

突然の登場に峻佑は驚き、ちひろとみちるは自分たちの恋人を奪

つてみせると宣戦布告してきた相手なので、険しい顔で姉妹を睨みつけていた。

「おい、賢悟。たぶんここはもうじき修羅場になる。今日は特に急ぎの仕事もないから、巻き込まれなくなかったら今すぐ帰った方がいい」

2組の双子の姉妹のにらみ合いで生徒会室に火花が散る中、峻佑は額に汗を浮かべながらも、この場で唯一無関係の賢悟にそう声をかけた。

「えっ？ は、はい！ し、失礼します！」

賢悟は一瞬不思議そうな顔をしたが、峻佑がさっきまでと違う、険しい表情になっているのを見て、危険を察知したのか素早く生徒会室を後にした。

「ふふ、さすが、わたくしが惚れたお人ですね。あの後輩くんを先に帰らせたのは、秘密を守るためかしら？ ねえ、魔法使いの末裔さん？」

賢悟が生徒会室を出て行ってから、渚が口を開いた。
『なっ！？』

突如飛び出した渚の爆弾発言に、3人同時に声を上げてしまった。
「驚く必要はないわ。だって、わたくしたちも、あなたたちと同じ、魔法使いの末裔なんだもの」

渚は平然とした顔で自分たちの正体を明かして見せた。

「ふーん……確かに魔法使いみたいね。あたしたちに比べてオーラが微弱だから気づかなかったわ。で、それをあたしたちにバラしてどうするの？」

さりげなくちひろが渚を見下してチクリと口撃しながら訊ねると、
「ずいぶんと余裕ですわね。でも、こうされてもまだその余裕を保てます？」

渚はこめかみをヒクつかせながらも、冷静さを失わずに、右手を峻佑に向けた。その直後、手から出た光の輪が峻佑を捕まえてしまった。

05 - 2 生徒会室にて（後）

「……え？」

一瞬何が起こったかわからず呆然とする峻佑。

「峻佑くん！ ちょっと、なにしたのよ！」

ちひろは峻佑の身を案じつつも、渚に食って掛かる。

「峻佑さんを捕まえて拉致して、ゆっくり暗示にかけてあなたのことを忘れさせてあげるのよ。さ、参りましょうか」

渚は笑顔のまま、物騒な発言をして、右手をクイツと動かした。

すると、光の輪で身動きが取れない峻佑の身体がふわりと浮いて生徒会長の机を飛び越え、渚の腕の中におさまった。

「ちよ、待ちなさいよ！ あれ！？ う、動けない！？」

慌ててちひろが止めようとするが、なぜか足は一步もその場から動けなかった。

「わ、私も……っ！」

みちるもどうにか動こうとするが、こちらも足が床に張りついてしまったかのように全く動けなかった。

「甘いよ、あなたたち。栞たちのオーラが小さいって、ナメてたでしょ。栞の全力、見せたいよ」

ちつつと指を振りながら出てきた栞がそう言った直後、ちひろとみちるは目を丸くした。

「そ、そんな……」

「ウソでしょ……」

2人が驚くのも無理はない。栞がチカラを解放したときに感じたオーラは、2人のそれを上回る大きさだったのだから。

「ちなみに、これで栞の全力の90%くらい。お姉ちゃんが全力出したら、もつと凄いよ。それでも、まだ諦めるつもりはないの？」

ふう、と軽く息をついてチカラを収めると、栞は満面の笑みでちひろやみちるに言い放った。

「当たり前よ。峻佑くんは、誰にも渡さないんだから！」

ちひろはそう強がってみせるが、栞の圧倒的なチカラで押さえ込まれ、動けない事実は変わらない。

「栞ちゃん、そろそろ行くわよ。栞ちゃんが狙ってる耕太郎くんも捕まえに行くんでしょ？」

渚が栞にそう言つて促すと、

「はい、んじゃあねえ、もうしばらくそこでもがいてるといいよ。」

栞は可愛らしいウインクをひとつ、ちひろとみちろの方に向けてすると、渚と一緒に峻佑を連れて生徒会室を出ていこうとした。と、
「峻佑くん、ご先祖さまのチカラを解放して！」

ちひろは最後の手段として、そう叫んだ。

「そうだったな。あーらよつと！」

峻佑はニヤリと笑うと、取り憑いてる真野家の始祖、ジエン＝マノールのチカラを解放し、渚の魔法による呪縛から脱出した。

「え、そ、そんなんっ！ 峻佑さんは魔法使い特有のオーラがないのに、なんでなのっ!？」

自らの手中におさめ、高笑いが飛び出しそうになっていた渚は、不意に起こった逆転劇に驚きを隠せなかった。

「ああ、オレはただの人間だ。でもな、オレにはこの方が憑いてるのさ。」

峻佑が渚の疑問に応えるようにそう言うと、峻佑の背後にジエンの幽体が浮かび上がった。

「ゆ、幽霊……！」

どうやらこの2人、魔法使いの割に幽霊とかはダメなのか、ジエンの幽体を見て震えあがっていた。

「オレ自身はあくまでただの人間だが、ほぼ常にジエンさんが憑いていていざという時にはチカラを貸してくれる。だから、魔法で暗示にかけて、とかの類はほぼ通用しないからな。キミらこそ、オレを甘く見たな。ってか、暗示でオレの気持ちそんなやりかたを自分に向けさせて、

ホントにそれでキミらは満足できるの？ 本当に好きな相手なら、魔法なんて使わないで正々堂々と立ち向かいなよ」

峻佑は渚たちに、自分を惚れさせたいなら卑怯な手を使わず真っ向勝負しろ、と言うと、ガツクリしてる渚たちをちひろやみちると協力して生徒会室から放り出すと、カギをかけて今日は帰ることにした。校門を出てすぐ、みちるは携帯を取り出して耕太郎に電話をかけた。

もしもし？ みちる、どうしたんだ？

すぐに耕太郎は応答し、どうしたのか訊ねると、

「もしもしコーくん、もう家に帰ってる？ ちょっと話があるから、これから家に行ってもいい？」

みちるは姫野姉妹のことを話すため、耕太郎にそう訊ねると、

ああ、大丈夫だ。——電話じゃ話せないような話、ってことだな？ OK、待ってるよ

耕太郎は大きく頷き、その内容を察してそう告げると、電話を切った。

「じゃあ、ちょっと私コーくんの家に行って、今日のことを話してくるね」

携帯をしまいながらみちるがちひろと峻佑に向かってそう言う、「ええ、わかったわ。行ってらっしゃい。夕飯の支度はあたしたちでやるから、沢田くんとゆっくり話してきていいわよ」

ちひろも笑顔でみちるを送り出した。

「うん、ありがとう。じゃ、行ってくるね」

みちるはそれだけ言い残すと、レポートでフツと消えた。

「じゃ、あたしたちも帰りましょうか」

ちひろと峻佑は互いに頷きあうと、夕暮れに染まる家路をたどるのだった。

「……なるほど。そんなことがあったのか」

耕太郎はすぐにやってきたみちるを家に入れると、自室で話を聞き、深く頷いた。

「うん。あの2人が魔法使いだったってだけでも驚いたのに、魔力の強さには自信があった。私たちを遥かに上回るチカラの持ち主だなんて……」

みちるは改めてその現実を見つめてため息をつき、

「峻佑はみちるたちのご先祖様の幽霊が憑いてるからまだなんとか
なるとしても、俺はどうすればいい？ みちるやちひろちゃんより
も強いチカラを持つてるんじゃない？ 守ってくれと言ってもダメかもし
れないんだろ？ なんとか自分で自分を守る手段はないもんな？」

耕太郎はみちるに自衛手段の有無を訊ねた。

「そうね……彼女たちは峻佑くんの奪取に失敗した以上、先にコー
くんを狙ってくると思うわ。峻佑くんを拉致しようとしたとき、『
暗示をかけて忘れさせる』って言うてたから、今度こそただの人間
であるコーくんには十中八九同じ手段を取ってくると思うの。対抗
するには、私が先に暗示をかけておくか、コーくん自身の強い気持
ちなんだけど、私の魔力じゃ彼女たちに勝てないから、先に暗示を
かけたところで、上書きされるのがオチね。だから、コーくん自身
が、暗示に負けないっていう、強い気持ちを持っていて。人の心に
作用する魔法っていうのは、かけられる側が一瞬でも弱みを見せた
ら負けちゃうから、『絶対負けない』って思ってる」

みちるは少し考えた上で、自分では勝てないとはつきり告げ、耕
太郎自身の気持ちの問題だ、と話したが、その表情は絶望で陰がさ
していた。

「そうか、わかった。なあ、そんな表情かおするなよ、みちる。峻佑アイツた
ちほどじゃないけど、俺たちだってもう1年以上付き合ってきてる

んだ。あんな突然ポツと出てきたようなのには気持ちが揺れたりなんかしない。俺を信じる」

耕太郎は優しくみちるを抱きよせると、耳元でそう囁いた。

「そ、そうだよねっ！ コーくんの彼女の私が信じてあげなくちゃ、勝てるものも勝てないよね！」

みちるは努めて明るい声で喋ろうとしてはいたものの、涙声になってるのを耕太郎は聞き逃さなかった。とはいえ、それをあえて言う必要はない、と耕太郎は自分の胸に顔をうずめているみちるをそのまましばらく抱きしめていたのだった。

一方、その頃――

「意外と手ごわいですわね……どうしたものかしら」

放課後、峻佑の奪取に失敗した渚は、帰宅後にひとり考えていた。峻佑の彼女であるちひろと比べて自分の方がチカラは上なので、抵抗されても押し勝てる自信があった。だが、ただの人間だと思っていた峻佑にまさかの後ろ盾がいたことによる動揺と、峻佑が最後に言った、“魔法で人の心を自分に向けさせて本当に満足なのか”という言葉が胸の中で引っかかっていた。

「真っ向勝負じゃ勝てる気がしないから、こんな手段を取っているのよ……」

ベッドの上に座り、膝を抱えながらぼやいていた、そのとき。

「コトッ」という小さな音が渚の耳に届いた。

「だ、誰っ!？」

妹の栞は買い物に出かけていて不在。両親は共働きで夜遅くならないと帰ってこない。いやそれ以前に家族の誰かだとすれば、不審な足音など立てずに部屋に入ってくるはず、ということから、渚は足音を立てたのは不審者と断定し、叫んで部屋を飛び出した。

「……いない？」

足音に気づいてから3秒と経たずに部屋を飛び出したはずなのに、

部屋の外はおるか、家の中のどこにも不審者が侵入した形跡はなかった。階段の途中にある窓はもちろん、玄関も栞が出かける時に力をかけたまま、開けられた形跡はない。勘違いか、と部屋に戻りかけた渚だったが、

「何かしら、これ……」

明らかに見覚えのない、封のされていない白い封筒が部屋の前に落ちていた。とりあえず拾い上げて、中を開けてみると、手紙が1枚入っていた。

「んーつと、『生徒会のカップルを引き裂きたいと望むなら、我々と手を組んでいただきたい。奴らカップルがケンカでもすれば、我らの目的である生徒会への復讐も同時に成すことができるのでは。』手を組んでもらえるなら、明日の放課後、旧校舎2階に来てほしい」
？ なんなのかしら……」

手紙を読んだ渚は、首を傾げていた。と、そこへ、

「ただいまー」

買い物に出ていた栞が帰ってきた。

「おかえりなさい、栞ちゃん。さっき、何者かが家に侵入したみたいなんだけど、何をするわけでもなく、ただコレを置いて立ち去ったみたいなのよ」

渚は階段を下りて居間に向かい、栞を出迎えると、手紙を見せながら先ほど起こったことを栞に話した。

「え？ その手紙を置くためだけにこの家に侵入した人がいるの？ ちよつと、正気とは思えないんだけど……」

栞は荷物を置きながら、渚に聞き返していた。

「ええ、部屋にいたら、廊下で小さな足音がして、すぐに部屋を飛び出したけど、侵入者は見当たらなかったわ。代わりに、その手紙が落ちてたの」

渚はそう言いながら手紙を栞に渡し、読むように促した。

「……なにこれ。ずいぶん栞たちの状況に詳しいみたいだけど、どうする？ 明日、この手紙にあるとおり、旧校舎の2階に行ってみ

る？」

栞は手紙を読むと、渚にどうするか訊ねた。

「そうね……とりあえず行くだけ行ってみるのも悪くないでしょう」
渚は頷いたが、内心では“正体不明の相手を信じられるのか”と
自問自答するのだった。

翌、木曜日の早朝、まだ登校時間には早過ぎるにも関わらず、通学路を往く4人の男子生徒がいた。いや、4人のうち2人は制服を着ていないので、普通の通学時間帯であれば、明らかに不審者扱いをされていただろう。そんな怪しげな4人組の、私服を着ている2人のうち、1人が口を開いた。

「猿義サル、本当に今度こそ生徒会ヤツらをぎゃふんと言わせることができるのか？ 正直、仙堂が会長をやっていたときより今の生徒会は手ごわい。ましてやお前が1年だった時と比べたら天と地ほどの差がある。それでも勝算はあるというのか？」

すると、制服を着ている男——猿義が口を開いた。

「もちろんです、神楽さん。ヤツらが手ごわいのはひとえに魔法という未知数のチカラがあるから。ならば、こちらにもそういう仲間を作ればいいだけ。そこで、彼らの出番ってわけです」

生徒会の魔法使い対策として猿義が招聘しょうへいしたのは——

「初めまして、ですね。ボクの名は熱田あつた 輝ひかる。生粋の魔法使いではないけれど、ある程度魔法が使える、遙か昔に魔法使いたちによって作られた非合法地下魔法組織【ノアの箱船】第28代総帥です。現生徒会の人たちとは2年前にひと悶着あったので、その時の借りを返すためこの場にやってきました」

もう1人の私服の男——輝が自己紹介して恭しく一礼した。

「オイラもいるぜっ！ ちー姉やみー姉の従弟なら、戦力としては文句ないだろ？」

自分を無視するな、と言わんばかりに小さな背で精いっぱい背伸びして存在を主張している制服の少年、琢磨たくま。ちひろやみちるの従弟である彼は、猛勉強の末、無事に竹崎高校に入学し、2年生になっていた。だが、どこで道を誤ったのか、ちひろやみちるの所属する生徒会と敵対するアンチ生徒会の一員になっていた。とは言つて

も、ちひろもみちるも彼が後輩になったのは知ってても、アンチ生徒会に入ったことまでは知らないのだが。

「なるほど、目には目を、魔法使いには魔法使いを、か。だが、生まれながらの魔法使いでないなら、どうやって魔法を身につけた？ それと、生徒会側は生粋の魔法使い2人に、噂では会長の市原もどうやってかは知らんが魔法を使えるというぞ。2人で3人を相手にするつもりか？」

神楽はある程度納得がいったようだが、口の端を歪めて薄く笑うと、輝に立て続けに疑問を投げかけた。

「オイラはもちろん生まれながらの魔法使いなんだぜっ！ ついでに言えば、ちー姉やみー姉はたぶん今でもオイラのこと苦手にしてるかも」

無駄に元気のいい琢磨は自分こそがちひろやみちるに対しての秘密兵器だということを主張していた。

「ボクが魔法を身に付けたのは、コレを使っただけですよ。この薬は、先代の総帥だった父が若い頃に完成させた、“誰でも魔法使いにできる薬”です。そして、長年の研究の末、12年前に実用化させ、組織を一気に巨大化させた。父やボク自身も実用化された時点で投与し、魔法を使えるようになった。人間って、誰でも潜在的には魔法の力、すなわち魔力を持っているんです。それを顕在化させるのがこの薬、ってわけです。だけど、2年前にこの街で真野姉妹を仲間に取り入れようとして失敗し、戦いに敗れてボクは街を出た。それからこの薬をさらに改良し、完成したのがこれです。カプセル剤として持ってきたので、飲んでください。これで頭数としては4人それと、猿義さんが他に同志を見つけたと言っていましたよね？」

輝は神楽と猿義に改良した薬のカプセルを手渡し、猿義に話を振った。

「もちろん、熱田君の言うとおり拙者はさらなる同志に出会えた。彼女たちがその気であるならば、放課後に我々のアジトに来る手はずになっている」

猿義はそれだけ話すと、輝に渡されたカプセルを飲み込み、それを見て神楽も同様にカプセルを飲んだ。効果はすぐにあらわれ、

「な、なんだこの身体の中からチカラがわき上がるような感覚は……」

神楽は未知のチカラを手に入れた感慨に打ち震えていた。

ほぼ同時刻、市原家――

「な、なんだあ！？」

まだ起きる時間には少し早い、地震のような揺れを感じて峻佑は飛び起きた。すぐに携帯を操作して情報を調べようとしたのだが、この時間、どこかで地震が起こったというニュースはどこにもなかった。少し考え、もしかと思った峻佑は部屋を出てちひろとみちるがいる隣の部屋の扉を開けた。

「ちひろ、みちる、起きて……ってまたやつちまつ――」

何度やっても学習能力のない峻佑は、部屋のトラップに引っかかり、バゴン、というすごい音でタライの顔面直撃を受けていた。

「いてて……ちひろもみちるも起きてるんだったらトラップ止めてくれよ……」

すでにちひろもみちるも起きていて、ベッドの上で考え事をしてるようだった。そこに峻佑が入ってきてタライのトラップに引っかかったのを見て笑いをこらえるのに必死な2人に、峻佑は涙目で抗議した。

「ゴメンゴメン。まさか峻佑くんが起きてくるなんて思ってなかったんだもの。で、起きてこっちに來たってことは、峻佑くんも今のを感じたの？」

みちるは謝ると、急に真面目な顔して峻佑に訊ねた。

「ああ、最初は地震かと思ったけど、そんな情報はどこにもなかった。んで、もしかやと思って聞きにきた。なあ、ちひろ。今の揺れはなんだったんだ？」

峻佑は頷き、今度は逆にちひろに揺れの正体を訊ねた。

「たぶん、いえはば確実に、今の揺れは魔力振動ね」

ちひろは確信をもって、そうつぶやいた。

「魔力……振動？」

聞きなれない単語に峻佑が聞き返すと、

「分かりにくい話だから別のものに例えるね。たとえば、パンチを繰り出すと、その拳の速さで、わずかな風が生まれるでしょ？ それと同じような話で、魔法使いが内に秘めたチカラを解放した瞬間、魔法を扱える者にしかわからない振動があるのよ。実際にやってみるね？」

みちるがたとえ話を交えて説明をし、実演してくれるというので、峻佑は頷いた。その直後、峻佑は見えない重圧に襲われ、汗だくになつていた。

「……とまあ、こんな感じにね。今さっきの揺れもそれだと思っただけど、問題は誰なのか、ってことなんだよね。私たちが知ってる中で魔法使いなのは親類を除けば姫野姉妹と九崎くんだけ。でも、3人じゃない気がするのよ。なんとなくだけど、魔力振動と同時に感じたオーラはごく微弱で、それでありながら獣のような荒々しさを持っている、そんな感じ。なんだろ、このイヤな予感……」

みちるは解放したチカラを収めると、表情を曇らせてつぶやき、「そうか。まあ、とりあえず、ガッコ行く支度しようぜ。生徒会役員が遅刻したらシャレにならないだろ」

峻佑はみちるの肩をポンとたたくと、そう言って姉妹の部屋から出ていくのだった。

07 帰ってきたアンチ生徒会（後書き）

この回から出てきた琢磨のエピソードは前作VOL・23～25を、輝のエピソードはVOL・49以降をどうぞ。

猿義や神楽など、アンチ生徒会のレギュラーメンバーについては、前作の各所に散らばってますので……

峻佑たちが登校して教室に入ると、彼を待っていたかのように渚が近づいてきた。昨日のことがあるので自然と身構える峻佑だったが、

「そんなに警戒なさらないで。今は何もいたしませんわ。ただ、聞きたいことがあるのですが、よろしいですか？」

渚はニコニコとした笑顔で峻佑に話しかけた。

「聞きたいこと？ 校内の案内か？」

峻佑は警戒態勢を崩さないまま、渚に聞き返した。

「いえ、校内の案内はもう十分にしてもらったのでいいのですが、昨日、うちにこんな手紙が届いたのですが、心当たりありますか？」

どうやら渚はとりあえず行ってみる前に、校内のことについて詳しくそんな人物——生徒会長の峻佑に聞いてみることにしたらしく、カバンの中から昨日の手紙を取り出して峻佑に見せた。

「見てもいいのか？」

峻佑は手紙を受け取ってから確認すると、中を開いた。

「……………」

そこに書かれた文面を見て、峻佑の顔が険しくなった。

「心当たりある、って顔ですわね。それを書き、届けた方について教えてくだらないかしら？」

渚はそんな峻佑の表情から何かを知っていると判断したらしく、そう頼みこんだ。

「心当たりあるっていうか、こんなことするのはアイツらしいない。姫野さん、この手紙では放課後に旧校舎、ってあるけど、そこへ行けばオレたち生徒会と真っ向から敵対することになる。コイツらは生徒会に異常なまでに敵意をむき出しにして、学校行事で度々悪さをしているアンチ生徒会。まっとうな高校生活を望むなら、行かないほうがいいね。姫野さんが正しい選択をすることを信じてる

よ」

峻佑は手紙の送り主について話し、手紙を渚に返した。

「そう……栞ちゃんと少し話してみますわ」

渚は手紙を受け取ってカバンにしまうと、そのまま教室を出て行った。

昼休みは生徒会の仕事をすることに決めているので、峻佑たちはそれぞれ弁当を片手に生徒会室へ向かった。

「ん？ ドアに何か紙が貼りつけてあるな……」

生徒会室が見えてきたところで、両開きの大きな扉の真ん中に紙切れが1枚貼りつけてあるのを峻佑が見つけ、少し足を速めた。

「『生徒会諸君、ずっとやられ続けた我々だが、いつまでも勝者でいられると思うな。我らアンチ生徒会は諸君らに宣戦布告する』だあ？ ナメたマネしてくれんじゃん、アイツら……」

峻佑は文章を読むと、紙をはがし、ぐしゃりと握りつぶした。

「し、峻佑くん。とりあえず落ち着いて、ね？」

あまりの形相に、みちるが峻佑をなだめにかかるほどだった。

「ったく、最近アイツらぼつたらかしにしていたから調子に乗ってやがるな。ガサ入れ、やっとか」

「うん、そうだね。最近おとなしいと思ってたら水面下で動いてたなんてね。そろそろ完全に叩き潰すべき時が来たのかもね」

峻佑がボヤキ、ちひろも後ろで頷いていた。結局、昼休みは仕事にならなかったのは言うまでもない。

「あー、賢悟。これからアンチ生徒会のアジトをガサ入れしに行くわけなんだが、その前にちょっと話、いいか？」

放課後になり、一旦生徒会室に集まった生徒会メンバー4人。やるなら早く行こう、とはやる気持ちを抑えられなさそうな賢悟に、峻佑が話を振った。

「なんすか？ 生徒会役員として一番楽しみだったことができるから早く行きたいんですけど」

「どうやら賢悟が生徒会に入りたかった理由はアンチ生徒会との決戦^{バトル}だったようで、一刻も早く行こうと言わんばかりに足踏みしながら聞き返した。

「まあ、落ち着けて。すごく大事な話なんだ。なあ、賢悟。お前は“魔法”ってものを信じるか？」

峻佑は賢悟に落ち着くよう言うのと、不意にそう切りだした。

「ど、どうしたんすかいきなり？ えらい唐突な質問ツスね。んー、“魔法”って、ドラ。エやファ。ファンとかのゲームに出てくるようなものツスよね？ 信じる信じないは置いて、あつたら面白いんじゃないすか？ で、なんでまたこんな質問を？」

賢悟はRPGゲームに出てくるものを想像したらしく、そう答えた。

「そうか、良かった。生徒会役員として一緒にやっていく上で、そろそろ話しておかないとならないことがあつてな。実は……」

峻佑はホッとした表情を見ると、苦笑しながらちひろとみちるが本物の魔法使いであること、そして自身も彼女たちの始祖の幽霊の力を借りて多少ではあるけど魔法を扱えることを告げた。

「ええ——っ！？」

初めて知った事実^{事実}に賢悟は驚き、絶叫していた。

「驚くのも無理はないな。ついでに、確かお前のクラスに榊琢磨^{トモ}ってのがいるだろ？ アイツはちひろやみちるの従弟で、同じように魔法使いだ。さらに言えば、昨日の放課後、転入してきた双子の姉妹がここに来たとき、お前に先に帰れって言っただろ？ あれも同じ理由で、あの姉妹も魔法使いの末裔^{マシ}とのことだ」

次々と峻佑が明かす事実^{事実}に、賢悟は声も出せなかった。

「……なるほど、そうだったんすか。それで、先輩はなんでいきなりおれにそんな話を？」

少し落ち着きを取り戻した賢悟が峻佑に訊ねた。すると、
「もしかしたら、これからアンチ生徒会とやりあう中で、いるかもしれないの。実際に目にして驚く前に、予備知識じゃないけど話せることは話しておいたほうがいい、って思ったのよ」

みちるが峻佑の代わりに賢悟に話した。

「そうツスカ。わざわざすみません」

賢悟が上級生の気遣いに礼を言ったところで、

「よし、じゃあ行こうか」

峻佑が立ち上がったて3人に声をかけた。すると、

「そこはビシツと“行くぜ!”とか言ってくださいよ、先輩……」

峻佑の気が抜けるような言い方でガクツとした賢悟がダメ出しをした。

「お、おう……じゃあ改めて、行くぜ！」

『おおー!』

峻佑が照れ笑いをしながら仕切り直し、生徒会の面々は生徒会室を飛び出した。

09 - 1 中庭の決戦（前）

《ヒツヒツヒ……コレ以上先二進むナラ安全八保障シナイヨ……》

峻佑たちが本校舎と旧校舎をつなぐ渡り廊下に差しかかったところで、どこからともなく不気味な声が響いてきた。

「誰だっ！」「誰なのっ！？」「誰っ！ あたしたちを生徒会執行部とわかっててやってるの！？」

峻佑、みちる、ちひろは怪奇現象（？）にも慣れているのか、不気味な声に言い返していたが、

「……………」

賢悟は早くも顔が青ざめ、ヒザはガクガク震え始めていた。それでも、まだ戦意は失ってないらしく、歩みを止めるまではしなかった。

「おい、賢悟？ 大丈夫か、顔が青いぞ」

生徒会室を出てから一言もしゃべっていない賢悟に違和感を感じた峻佑が振り向いて訊ねた。

「だ、大丈夫っす。べ、別にビビってるわけじゃないんすよ、コレ」

賢悟は必死に強がってみせるが、賢悟が怖がってるのは誰の目にも明らかだった。

「賢悟くん、無理はしないでいいよ。彼らがホントに魔法を使える何者かを仲間に加えていたら、賢悟くんにできることは何もなくなっちゃうから。キツイ言い方かもしれないけど、仮に転校生の姫野さん姉妹が向こうについていたとしたら、私たちが全力で向かっても勝てる見込みは30%がいいところ。ましてや賢悟くんや峻佑くんを守りながらなんて言ったら、間違いなく勝てない。だから、この先も一緒に行くのは構わないけど、ひとつだけ約束して。もし、アンチ生徒会側に姫野姉妹のうち片割れでもいたら、すぐに逃げていい？」

みちるがいったん立ち止まり、賢悟の目を見て諭し、そんな約束

をした。

「は、はい。わかりました。……よしっ！ すんません、もう大丈夫ッス！」

賢悟はみちるの真剣なまなざしにただ頷くと、深呼吸をして落ちつきを取り戻した。

「ん、どうやら声の主はアレだな」

賢悟とみちるが話している間、周囲を見回していた峻佑が渡り廊下の本校舎側の扉すぐ上に設置されたラジカセに気づいた。

「ずいぶん複雑な配線してやがるが、カラクリは読めた。特殊なセンサーの受信機が何かを関係者にはつけておき、つけてない人物がここを通りかかると、センサーが反応してさっきの声が流れる、ってとこかな。ったく、無駄に凝ったモノ作りやがって……」

峻佑が背伸びをしてラジカセを引きずり下ろし、アレコレ調べた結果、とてつもなく凝った仕組みになっていた。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花、ってヤツっすね。こんなに少しでもビビってた自分が恥ずかしいッス」

賢悟が少し顔を赤らめてつぶやいた。さっきまで否定していた、ビビってたことを自ら肯定してしまったが、3人とも気づかないフリをすることにした。

「な……に？ 扉が開いてる……？」

峻佑たちがアジトの前に着くと、閉ざされているはずのアジトの扉はすでに開いており、中はおぬけのからだだった。まさかの展開に絶句する峻佑に、

「先輩！ ここに何か手紙らしきものがあります！」

賢悟が扉の横に無造作に張り付けられた紙切れを見つけ、峻佑を呼んだ。

「なんだって？」

峻佑が賢悟から紙切れを受け取って文面を目で追った。

——ハッハッハ、無能な生徒会諸君、最終決戦とシヤレこもうじ

やないか。キミらが勝てばもちろん我々は解散し、OBはともかく現役メンバーは真つ当ないち生徒に戻ろう。だが我々が勝てば、キミら生徒会を廃し、我々が真・生徒会として実権を握らせてもらう。互いの存在意義をかけた最終決戦、中庭で待っている。by神楽

アンチ生徒会の創設から今春卒業するまでずっとリーダーであり、卒業してOBになっても未だちよくちよく顔を出しているという噂のあつた神楽が直に果たし状を出してきた。完全に生徒会を挑発している内容に、峻佑は静かな怒りに燃え、無表情のまま紙を引きちぎった。

「——行くぞ、中庭だ」

普段の峻佑らしくない低い声色の放つ迫力に、誰も何も言えずに無言で後をついていった。

09 - 2 中庭の決戦（後）

「――来たか」

中庭で峻佑たちを待ち受けていたのは、神楽、猿義、そして――
「た、琢磨あ!？」

柱の影からひょっこり出てきた3人目の人物を目にしたちひろが驚いて声を上げた。

「へへん、驚いた？　ちー姉やみー姉、まだオイラのこと苦手意識もってるでしょ。だから――」

琢磨が得意げな顔をして話している間に、みちるが携帯でどこかに電話をかけた。

「あ、もしもし英里叔母さん？　ちよつと、琢磨のことで話が……え？　今日非番なんですか？　なるほど……じゃあ、待つてますね」
みちるはどうやら琢磨の母、英里に電話をかけていたらしく、待つてる、と電話を切つてすぐに、

「やつほ、ちひろちゃんにみちるちゃん、それに峻佑くんも。またうちの琢磨^{バカ}が迷惑かけてるみたいでゴメンなさいね。今日という今日はとつちめてやるんだから。琢磨あ！　逃げんじやないよ!」

唐突にその場に瞬間移動^{レポート}で現れた英里は、いつもの笑顔で峻佑たちに片手をあげてあいさつすると、急転直下、般若のような形相になり、まさかの母親登場でこそそこそ逃げ出そうとしていた琢磨を一喝し、そのあまりの大声に琢磨は転び、あえなく英里に捕まってしまい、ズルズル引きずられながらこの場からは退場、ということになってしまった。

「やあ、久しぶりだね。2年ぶりくらいかな？」

そして最後に出てきた男がそう峻佑たちに話しかけた。

「お、お前は……!」

峻佑はその人物に見覚えがあるような気がしてそう返したが、

「……………誰だっけ？」

名前が出てこず、シリ阿斯な空気をぶち壊し、その場にいた全員がずっこけた。

「こ、このボクを、魔法組織【ノアの箱船】第28代総帥、熱田輝の名を忘れたとは言わせないよ……！　ボクをコケにしたこと、後悔させてあげるよ」

かつて本気で戦った者に名を忘れられていたことを「コケにされた」と感じた輝が額に青筋を浮かべて名乗りをあげた。

「冗談だ、冗談。テメーの顔はあれから一度たりとも忘れちゃいねえ。あの時のトドメはコータローたちに持ってかれたからな。その時の恨み、晴らさせてもらうぜ」

峻佑は怒っている輝をなだめるように冗談だ、というときちんと真面目な顔に戻して、輝をにらみつけながら宣戦布告をした。

「そう上手くいくかな？　ボクとて2年前のボクじゃない。あの時のままだと思つてると、痛い目を見るのはそっちだよ」

輝も負けじとにらみ返し、峻佑を挑発する。

「さて、我々の仲間に熱田殿がいることからわかるように、我々は生徒会に対抗するための秘策として魔法使いを招聘した。もう簡単にはやられはせぬぞ。無論、熱田殿だけではない。転校生の――」

猿義が峻佑たちに、峻佑たちが持っていた魔法という一種のアドバンテージは無くなった、と声高に叫び、さらに何かを言いかけたところで、

「残念だが、姫野姉妹なら来ないと思うぞ。今朝、姉の渚の方がオレのところに相談しに来てな、おそらくてめえらが出したものだと思ふ手紙を見せてもらったから、生徒会と敵対したくないならそこには行くな、って言うておいたからな」

峻佑が猿義の言葉を遮り、猿義が期待していた姫野姉妹が来ないだろう事を冷徹に告げた。

「んなつ！？　どこまでも我々の邪魔を……」

峻佑たちが生徒会室で姫野姉妹にコテンパンにやられた、という

(一部間違っている) 情報をキャッチしたあと喜んで姫野姉妹の家に忍び込んで手紙を置き、仲間に加えられれば対生徒会における最強の切り札になると見込んでいた猿義は愕然とした。と、そのとき「ぶつぶー、市原くんもはつずれー」

その場に響いた、少し幼さの残る声に、全員が声の聞こえた方向――渡り廊下の屋根の上を見た。

「別にどちらに加勢するというわけでもないですが、姫野渚と栞、参上しましたわ」

渚はクールにキメると、シュタツと屋根を蹴ってジャンプし、くるくると宙返りをしながら着地し、後から栞も続いた。

「これで役者はそろったか……？」

神楽がポツリと漏らしたひとりごとは誰の耳にも届かなかった。

「どっちに加勢するわけでもない……？　じゃあなんでここへ来た？」

なぜ明確な用もないのにわざわざこんな人気もなく、ジメツとした中庭に彼女たちがやってきたのかわからない峻佑は首を傾げて訊ねた。

「ここへ来た理由？　単純に面白そうだから、ですわ」

渚はそっけない返事だった。と、そこにまた別の声が響いた。

「別と呼ばれちゃねえけれど、愛しのちひろさんを守るため、九崎翼、ただいま参上っ！」

翼は旧校舎の屋上から名乗りを上げて飛び降りたが、悲しいことに誰も彼の方を見ていなかった……

10 しよせん雑魚は雑魚（前書き）

0時の更新予定でしたが、諸事情により1時間繰り上げさせていただきます。

「とりあえず、わたくしたちは中立を宣言しておきますわ。ただの傍観者ということにしておいてください」

峻佑たち生徒会と、猿義たちアンチ生徒会が互いににらみ合つて火花を散らすなか、渚が中立を宣言した。

「そりや助かる。正直な話、キミらが向こうについたらオレたちの勝率はほぼゼロになってしまうからな。後は、巻き込まれてケガしねえようにもう少し離れてな。そのついでと言っちゃなんだが、そこで頭から地面に突っ込んでるヤツをどうにかしてくれるととっても助かる」

峻佑が大げさに肩をすくめながらおどけてみせると、そう言つて渚たちの近くで頭から地面にめり込んでる人物——先ほど屋根から飛び降り、着地に失敗した翼を指差した。

「ふふ、わかつたわ。やつぱり、優しいんですのね、峻佑さんは」

渚は並の男なら確実にオチるような眩しい笑顔で頷くと、翼を魔法で浮かせて地面から引っこ抜き、桀とともに少し距離をとった。

「これでも生徒会長やつてるからな。生徒への思いやりの心を忘れないだけだ」

峻佑はブイと顔をそむけると、ぶっきらぼうに吐き捨てた。

「さて、と。待たせたな。んじゃ、始めつか？」

渚たちが離れたのを見届けてから、峻佑は猿義に話しかけた。

「うむ。切り札がないのは諦めるしかないが、拙者たちとて今までのようにはいかぬぞ。いざ、参る！」

猿義は頷き、開戦を宣言すると、先手必勝と言わんばかりに、熱田の薬で目覚めさせた魔法の力を使い、氷弾を生成して峻佑めがけて放った。

「えっ！？　なんでお前が……そうか！　熱田の……　つとあぶねえ

！
」

猿義の忍者としての技は風系が中心で、まさか氷が飛んでくると思っていなかった峻佑は一瞬反応が遅れたが、横っ跳びでギリギリ回避した。そして、流れ弾は――

「ふうん……これはわたくしたちへの宣戦布告と受け取ってよろしいのかしら？」

峻佑に言われてある程度距離を取って、ベンチに座っていた渚と朧の足に当たり、2人の足は地面もろとも氷漬けになってしまっていた。渚はゆっくりと立ち上がり、身体に怒りのオーラをまとわせてつぶやいた。そのあまりのオーラに、足を封じていた氷はピキピキという音を立てて砕けていった。

「えーと、これはオレのせい……か？」

なんとなく気まずい雰囲気で峻佑が振り返って訊ねると、

「いいえ、峻佑さんに非はないですわ。わたくし姫野渚、中立を破って参戦しますわ。猿義とやら、覚悟はできていて？」

渚はゆっくりと首を振ると、猿義にビシッと右手の人差し指を突き付けて参戦を宣言した。

「もちろん、朧も参戦しちゃうよ！ 朧、怒ってるんだからねっ！ わかりやすく顔に「怒ってます」と書いてあるような表情をしている朧も同時に参戦を宣言した。

「あのー、先輩？ これはもう俺は立ち去った方がいい場面ですかね？」

と、どこことなく居心地悪そうな顔で賢悟が峻佑に訊ねた。

「そうだな……サルが魔法を使いだしたのはおそらく熱田のクスリだろう。ということはおそらく神楽さんも使ってくる。そうなる、あまりやりたくはないけど、魔法対決になるのは必至。済まないが、賢悟はここまでだな。この場所には一般人が近寄れないようにちひろが結界を張ってくれているから一般生徒とかが巻き込まれる心配はほばないけれど、念のため校内を見回りしておいてもらえるか？」

峻佑は少し考えて、賢悟を退場させることを決めた。ただ役に立たないから退場させるのではなく、別の“仕事”を与えて席を外す、という形にしたのは彼なりの優しさなのか。

「了解ッス！　じゃあ、先輩たち、気を付けて！」

賢悟は頷き、敬礼してみせると、走り去った。すると、

「敵に背中を見せるとは……」

今度は神楽が腕を弓矢に見立てて、走り去る賢悟めがけて雷を纏った矢を放った。

『うるさい！　ザコはすつこんでなさい！』

ちひろとみちる、さらには渚までもハモって叫ぶと、全く同じタイミングで光弾を放っていた。放たれた弾は神楽の矢を一瞬にして呑み込み、3人分が合体して1つの大きな光弾になり、神楽たち3人の真ん中ではじけた。

『ぐああああああつ！』

魔力の高い3人のそれぞれのぶんだけでも十分だったろうが、それが3人ぶん合体していれば、神楽たちのような“なりたて”で耐えきれようなものであるはずがない。神楽、猿義はもちろんのこと、彼らよりは魔法使い歴の長い熱田もあっさり倒れた。

「ふん、口ほどにもない人たちね」

渚は倒れた3人を見下ろして鼻で笑った。

「ま、楽勝だよ。でも、彼らに芽生えてしまった魔力、どうしよう……」

みちるが不安げにつぶやいた、そのとき。

「それはこの僕に任せてくれないか」

不意に聞こえてきた声に振り向くと、さっきまで地面に埋まっていた、頭がまだ土まみれの翼が立っていた。

「任せて、って……どうするの？」

ちひろが怪訝な顔をして訊ねると、

「僕の家系に代々伝わってきた秘伝の魔法のひとつに、“任意の相手から魔力を吸い取る”魔法があるんだ。それを使えば、魔力の低

「いものは完全に使えなくさせることができるんだよ」

「こともなげに言った翼に、」

「魔力を……吸い取るですって？」

「今度は渚が不思議そうな顔をした。」

「信じられない、って顔だね。なんなら、実演してみようか？ ええと、ちひろちゃん。僕に向かってなんでもいいから思い切り魔法を放ってみて」

翼はちひろに全力で魔法を撃てと頼んだ。

「いいのね？　いくわよ……とおりやあああああああ！」

ちひろは翼に再確認し、頷いたのを見ると、とても女の子が上げるようなものではないおたけびとともに特大の雷球を放った。

「九崎家秘伝……吸魔、封印！」

目を閉じ、集中力を高めていた翼がカツと目を見開き、放たれた魔法を両手で受け止めるように差し出した。すると、両手がエメラルドグリーンの光を運び、その光はちひろの雷球にまわりつく、少しずつちひろの雷球は小さくなり、やがて消滅した。

「まあ、ざっとこんなところだね。これの応用で、直接魔法使いの魔力を奪い取ることもできるんだよ。どう？　信じてもらえた？」

ちひろの魔法を完全に消し去ったことを確認して魔法を解いた翼は、ふう、と一息ついて笑った。

「そうね……目の前で見せられたら信じないわけにはいかないわね。少なくとも、あたしたちの家系にはそういう魔法は存在しないわね」
ちひろが複雑な顔をしてつぶやいた。

「なあ、やるなら早くやらないと、コイツら目え覚めちゃうぞ」と、峻佑が急かすと、

「それもそうだね。ああ、巻き添え食って吸い取られてしまう危険があるから少し離れていたほうがいいよ」

翼は他のみんなに離れるように言うと、再び目を閉じて先ほどの魔法を発動させ、葉でチカラを目覚めさせた猿義と神楽、そして熱田の魔力を根こそぎ吸い取っていった。ついでに猿義と神楽はちひ

ろと渚で今日1日の記憶が消され、彼らが魔法を扱えたという事実も痕跡も消し去るのだった。

10 しよせん雑魚は雑魚（後書き）

宿敵との決着をつけた割にはあっさりしすぎてゐる気もするけど、ひとまずこれはこれ。

次回はプロローグ以来の4分割の回。

峻佑たちに、最大の危機が迫っていた――

11-1 破局の危機(1)

「ん？ なんだ、こりゃ……」

アンチ生徒会を壊滅させた次の日、峻佑の下足箱に差出人の名前が書いていない、封筒に入った手紙が1枚入っていた。

「峻佑くん、どうかしたの？」

同じクラスで下足箱も近い場所にあるちひろが上履きに履き替えながら訊ねてきた。

「いや、ちよつと手紙が入ってたただけだ。封筒も特に飾りっ気ないし、ラブレターの類じゃないだろうから心配いらないよ。どうせまた恨み節だろ」

峻佑は封筒を開封せずにそのままカバンに放り込み、面倒くさそうにつぶやいた。というのも、峻佑がちひろと交際を始めた直後から、1ヶ月に1回は2人の仲の良さに嫉妬したような連中からの、いわゆる“不幸の手紙”のようなものが彼の下足箱に入れられている。誰がやったのか調べようにも、ワープロで書いてあるため、筆跡などで差出人を暴くことができないでいた。もちろん、魔法を使えば一発で差出人の正体を暴くこともできるが、魔法の存在が知られるリスクを考え、使わずにきたのだった。

「ああ、あれまだ来てたんだ。まあ、でも確かに気にするようなものじゃないわね」

ちひろも納得したようで、それ以上は何も訊かずに教室へ向かった。

(さて……まあ見る価値もないだろうけど、一応目を通しておくか……)

教室に入ると、ちひろはよく他のクラスメートたちと雑談を始める。さすがに家でも生徒会室でも一緒なので、教室だけではあまりイチャイチャするのはやめようということにしていた。周囲の反感

を抑える意味でもそれは効果的で、ずっと続けている習慣になっていた。そうなると峻佑は自分も他のクラスメートと、と周りを見たが、あいにく誰もいなかったたので、先ほどの手紙を開いてみることにした。すると、

「うわっ、なんだ!？」

封筒の端を破り、開封したとたんに目を開けていられないほどの眩しい光が封筒から放たれ、峻佑は驚いた。もちろん、驚いたのは峻佑だけでなく、近くで雑談していたちひろやクラスメートも何が起こったのか、というような表情で寄ってきた。

「な、なに？ 今の……」

他のクラスメートはたまたま光からお互いの身体を盾にして身を守れたが、峻佑が封筒を開けるのをチラチラ見ていたちひろは一瞬とはいえまともに光を見てしまい、視力を一時的に奪われたようにふらふらと机やイスにぶつかりながらもなんとか峻佑のところにとどろつき、訊ねた。

「わからん。さっきの封筒を開けたらいきなりコレだからな。で、中身は……と、白紙？」

峻佑もまだよく見えていないのか、繰り返しまばたきをしつつも、封筒の中身を取り出して、ようやく見え始めた目で紙を確認すると、白紙だった。

「白紙って……あ、ホントだ。じゃあ、今の光は……」

ちひろもようやく目が見えるようになり、峻佑から紙を見せてもらうと、確かに何も書いてなかった。一応、あぶりだしなどの細工の施された紙の可能性も考え、蛍光灯の光にかざしてみたりもしたが、そのような細工の痕跡もなく、完全な白紙だった。

「閃光弾でも仕込んであるのかとも思ったけど、その紙以外、この封筒には何もなかった。わけわかんねえけど、ま、単なるイタズラかな。ゴミだ、ゴミ」

峻佑は考えるのが面倒になったらしく、イタズラで片づけることにし、ちひろから白紙の紙を受け取ると、封筒ともどもゴミ箱に投

げ込んだ。

一方、ほぼ同時刻――

「お、なんだこれ……うわっ！」

耕太郎がみちると一緒に登校してきて、下足箱を開けると、そこには1通の白い封筒があり、何の気なしに開けた瞬間、激しい閃光が走り、耕太郎もみちるも驚いて尻もちをついていた。さらに、昇降口という場所柄、近くにいた他の生徒たちも巻き込まれて視力を奪われていた。

「うーん……なに、今の？」

みちるがまばたきしながら立ち上がって、耕太郎に訊ねた。

「わかんね。なんかのイタズラかもな。中に入ってた紙は白紙だし、もしこれがテキトーにそこらの下足箱に放り込まれていたら、立派なテロだな」

耕太郎は中の紙が白紙とわかったと、それをくしゃっと丸めてゴミ箱に投げ込んだ。

「うん、後で生徒会が調査してみるよ」

みちるは頷くと、まだちょっとふらついている耕太郎を支えながら教室に向かった。

――これがこれから先起こる事件の始まりになることを、誰も知る由がなかった。

11-2 破局の危機(2)

「どうしたの、峻佑くん？ 今日の峻佑くん、なんか変だよ？」

これまで授業中に居眠りなど一度もなかった峻佑が、1限目の英語で居眠りをして教師に教科書のカドで叩かれるまで起きなかったり、2限目の数学ではちひろほどではなくても得意科目と言えるはずなのに、当てられた問題を解けずに、クラスメートだけでなく教師にまで心配される始末。幸い3限目のこの日本史ではこれといった事件はなかったが、見かねたちひろがこうして聞きに来ている、というわけなのだった。

「あ、ああ……オレ自身もどうなってるのかさっぱりなんだ。英語ん時は、いつ寝ちまったのかわからないまま、気が付いたら教科書で叩かれてた。数学ん時も、いま問題を見直せば難なく解けるのに、なぜかあんときは本気で解き方が出てこなかった。今さっきの日本史も、何度か意識が飛びかけていたんだよ。自分で自分がコントロールできてない感じなんだよな」

ほかならぬ峻佑自身が一番困惑しているようで、そうつぶやいたと、

「峻佑くん、ちょっといい？」

ちひろが唐突に峻佑の肩に手を置いて、ずいっと身を乗り出すように峻佑の目をのぞきこんできた。

「お、おいちひろ？ どうしたんだよ、急に？ 教室ではこういうことを避けてきたはずだよ？」

驚き、戸惑いを隠せないような表情で峻佑はちひろに訊ねたが、それら一切を無視してちひろは峻佑の目を見つめ続けた。やがて、「ふう、もういいわよ。それで、昼休みに生徒会室で話したいことがあるから、4限目の体育が終わったらお昼は生徒会室で食べましょ。OK？」

大きく息を吐いて峻佑から離れると、ちひろは体操着の入った袋

をカバンから引つ張り出しながら、峻佑に昼休みに生徒会室へ来るように言って、更衣室へ駆けて行った。

「あ、ああ……ってか廊下は走るなよ……」

峻佑のぼやく声は、当然ながらちひろには届くこともなく、峻佑はすばやく体操着に着替えると、校庭に飛び出していった。

体育は2、3クラスが合同で行うことになっていて、峻佑たち2組は、1組と3組が一緒になっている。今日はサッカーでクラス對抗だったので、1組と3組がやってる間に、峻佑は3組のベンチに耕太郎がいるのを見つけ、暇つぶしに話をしに行った。

「よお、コートロー」

後ろから肩をトントンと叩いて片手をあげて挨拶すると、

「おう、峻佑か。1限と2限でいろいろとやらかしたらしいじゃねえか。3組まで噂が届いてるぜ。何があつたんだ？」
ウチのクラス

耕太郎は峻佑に気付くと、ベンチから少し離れて苦笑いしながら峻佑に訊ねた。

「オレにもわかんねえんだ。変わったことと言えば、今朝、下足箱に差出人の書いてない封筒が入ってて、開けたら中に閃光弾みたいなものが仕込んであつて驚いたことくらいだが、そんなイタズラで動揺してたんなら、逆に居眠りなんかできっこないってことで参ってるんだ」

峻佑が今朝の手紙のことを話すと、耕太郎が食いついた。

「え、それお前んところにも入ってたのか？ 実は俺んところにもあつて、昇降口で開封して、モロに閃光をくらって、しばらく目が見えにくくて参ったぜ」

耕太郎の言葉に、今度は峻佑が反応した。

「お前も？ なあ、今日の授業で何かおかしい感じとかはしなかったか？ 突然意識を失ったりとか」

まったく同じイタズラを受けていたことがわかった峻佑は、アレに何か手掛かりがあるかも、と思い耕太郎の肩を掴んで揺さぶりな

がら訊ねた。

「落ち着けて、峻佑。いや、確かに変と言えば変なんだが、俺の場合は峻佑と逆だな」

耕太郎は焦る峻佑を引き剥がすと、頬をポリポリかきながら、そう話した。

「逆、だって？ どういうことだ？」

峻佑はピタリと動きを止めて再度訊ねると、

「まあ、あまり誇れることじゃないが、相変わらず俺は普段の授業で居眠り連発して怒られてるんだ。もちろん、問題を当てられてもあまり解けずに教師の小言を食らうんだけど、今日は一度も居眠りしてないし、オレ自身が一番驚いてるんだが2限の英語で英文の訳を当てられたときに、誰の助けも借りずにすらすらと訳文が出てきたんだよ。教師も驚いて“何があった？”とか聞いてくるし、もうわけわかんねえ」

耕太郎は自分の身に起こったことを話すと、頭を抱え込んでしまった。

「確かにオレと真逆だな……なあ、コートロー、もしかしたらちひるが何か掴んだかもしれないから、昼休みに生徒会室へ来ないか？」

峻佑は少し考え、耕太郎にそう持ちかけた。

「ん、そうだな。みちるもたぶん行くだろうし、俺も混じらせてもらうか」

耕太郎は快諾し、峻佑は2組のゲームが始まるので自分のクラスに戻っていった。

11-3 破局の危機(3)

「来ないな……どうしたんだろ？」

4限目の体育の授業が終わり、ちひろが生徒会室にやってくると、みちると耕太郎が来ていた。しかし、すでに2組の他の男子は戻って昼食を食べているにも関わらず、峻佑の姿はどこにもなく、待てど暮らせど峻佑は現れず、ちひろがポツリとつぶやいた。

「その約束を忘れちゃって、どこかでお昼食べてるのかな……」

みちろがあまり考えたくない可能性を口にする、

「峻佑は、ちひろちゃんが何か掴んだかも、って言って俺も生徒会室に来ないかって誘ってくれたから、忘れてるってことはないはずだけど……」

耕太郎が峻佑をかばうように2人に言った。

「じゃあ……もしかしてもう手遅れ？」

ちひろは最悪のケースに思い至って顔が青ざめていった。

「そういえば、ちひろちゃん。あの封筒について、何かわかっていたの？」

耕太郎が思い出したようにちひろに訊ねた。

「え、あ、うん。休み時間に峻佑くんの目を見たときに、瞳の輝きが半分以上失われてたのよ。あの濁り方からして、何らかの魔法にかけられた可能性が極めて高いわね。たぶんだけど、封筒を開封したときのあのまぶしい光が魔法の発動だったんだと思うわ。ただ、光を見た、あるいは浴びた者すべてに影響を及ぼすわけじゃなく、峻佑ちゃんと耕太郎くん、それぞれをピンポイントで狙った、と考えるのが妥当ね」

ちひろは頷くと、封筒についての推測を話した。

「え、じゃあ俺の目も峻佑と^{アイツ}同じように濁ってるのか？」

耕太郎が焦ったようにちひろに訊ねると、

「ちよつと見せて。——うーん……峻佑くんほど大きな影響は受け

てないみたい。もうほとんどいつも通りよ。でも、なんでだろ？」

ちひろは耕太郎に近づいて、目をじっと見てみたが、ほとんど濁りのない、至って普通の目をしていた。

「無事ならこの際理由とかはどうでもいいよ。とにかく、峻佑くんを探そう。峻佑くんやコーくんを標的にするのって、犯人はあの2人で確定でしょ」

みちるはさつと立ち上がると、犯人は姫野姉妹だと言い切って、探しに行こうと言って生徒会室を出ていき、ちひろと耕太郎もそれに続いた。

早く峻佑を見つけないと、と焦っていた3人だったが、意外にもすぐに見つかった。生徒会室を出て、階段を下りようとしたら、峻佑がゆっくりと階段を上がってきていたのだ。

「峻佑くん！」

ちひろが呼びかけると、峻佑は顔を上げてちひろを見た。しかし、その目にはいつもの輝きがなく、焦点もあっていないように見えた。

「ちひろ……」

峻佑はちひろの目の前まで来ると、口を開いた。

「どうしたの、峻佑くん？」

ちひろが訊ねると、

「……………れよう」

峻佑は小さな声で何かをつぶやいた。

「えっ？ いまなんて言ったの？」

ちひろが聞き返すと、

「ちひろ、別れよう。オレたち、もう終わりにしよう」

峻佑の口から飛び出したのは、おそらく誰も予想しえない言葉だった。

「どうして？ 急にそんなこと言い出すなんて、峻佑くんらしくないよ。何かあったの？」

ちひろは峻佑がこうなった原因の大方の予測はついているが、あえて何も知らないふりをして、峻佑に理由を訊いた。

「わからない。けど急にちひろへの気持ち冷めちまったんだ。だから、別れて一度ただの友達、そして生徒会の役員仲間って感じにリセットしよう」

峻佑は理由を訊かれて困惑した表情になると、つぶやくようにそう話した。

「そう……わかったわ。でも、ひとつだけ条件があるの。一発、殴らせて。いい？」

ちひろはふう、とため息をひとつ吐くと、それを受け入れる条件として殴らせると言い出すのだった。

11-4 破局の危機(4)

「えっ!? ちょっと、姉さん!? 本気なの? それでいいの!」

横で黙って話を聞いていたみちるが慌ててちひろに訊ねると、

「だって、仕方ないじゃない。相思相愛じゃなくなっちゃったら、もう交際の継続はできないでしょ。だから、関係を清算するための儀式よ、これは」

ちひろは仕方ないと諦め顔でみちるに話したが、

(いいからいいから、あたしに任せて)

ちひろには何か考えがあるらしく、ひそかにテレパシーでみちるに伝えていた。

「ああ、オレのわがままだから、一発殴られるぐらいで済むなら構わない。……この2年弱、楽しかったぜ。ありがとうな、ちひろ」

峻佑はちひろの“条件”を快諾し、殴りやすいように中腰の姿勢をとった。

「うん、あたしもだよ……バイバイ、峻佑くん」

ちひろはそう話すと、思い切り拳を振りかぶって、バキツ、というすさまじい音をさせて峻佑の左頬を殴り飛ばした。予想より威力があったのか、それとも不安定な中腰だったのが災いしたのかはわからないが、峻佑はよろめいて、そのまま倒れこんだ。

「はあ……はあ……」

思い切り拳を振るい、息を荒げているちひろの頬には、涙が伝っていた。

「う……」

どうやら倒れこんだときに一時的に意識を失っていたらしい峻佑

がうめき声をあげて起き上がった。

「いてて……なんでオレこんなところで倒れてんだ？ あ、ちひろ、みちる、それにコータローまで……どうしてここに？」

峻佑はズキズキ痛む左の頬をおさえながら、キョロキョロ周りを見回して、3人を見つけると、そう訊ねた。

「どうしてここに？ じゃねえよっ！ てめえ、どういっつもりだ、ええ！？」

すると、耕太郎が激昂して峻佑につかみかかった。

「ちよつと待ってくれよ、コータロー。何の話をしているんだ？」

峻佑は耕太郎が怒っている理由がまったくわからないらしく、されるがままになりつつも、訊ねた。すると、

「てめえ、数分前に自分で言ったこと、忘れたとは言わせねえぞ。ちひろちゃんと別れるってのはどういっつもりだ、コノヤロー！」

耕太郎は峻佑がトボけていると思い、さらに峻佑の胸元をねじり上げ、ケンカ腰で迫った。

「おいおい、オレがちひろと別れる？ オレが本当にそんなこと言ったのか？ 体育が終わったあたりからの記憶があいまいなんだ。

なあ、ちひろ、みちる。そうなのか？ オレ、本当にちひろに別れてくれなんて言ったのか？」

峻佑は耕太郎から告げられたことに驚き、耕太郎の手を振りほどくことすら後回しにしてちひろとみちるに訊ねた。

「うん、残念だけど全部本当のことだよ。それで、姉さんが受け入れる条件として一発殴らせろ、って言い出して、殴って今に至る、ってところかな。姉さん、結局何がどうなったの？」

みちるは頷くと、これまでの経緯を話したが、自身も完全には理解できてない、とちひろに説明を求めた。

「んー、結論を端的に言っと、殴った衝撃で峻佑くんは正気を取り戻した、ってところね。正直、賭けだった部分がないと言えばウソになるけど、峻佑くんにかけられた魔法を解くためにはぶん殴るのが一番手っ取り早いって気付いたのよ。で、ちよっど殴る口実もで

きたから、ね。任せて、っていうのはこういうことよ。峻佑くん、ごめんね。右手を魔力で強化した状態で思い切り殴ったから、相当痛かったでしょ。でも、このくらいやらないと正気を取り戻せないからね。ところで、まだあたしと別れたいって思う？」

ちひろは真相を明かし、そのうえで改めて峻佑に訊ねた。

「そんなわけないだろ？ 変なこと言い出して済まなかったな、ちひろ」

峻佑はゆっくりと首を振り、ちひろに謝ると、残りわずかの昼休みを生徒会室に戻って過ごしたのだった。

12 - 1 姫野姉妹、もうひとつの秘密（前）

「どういづつもりのの？」

放課後、峻佑、ちひろ、みちる、耕太郎の4人は生徒会室で渚と栞を問い詰めていた。昼休みが終わるとき、『話があるから放課後に生徒会室に来て』と言っておき、2人が入ってくるなりちひろが単刀直入に切り出したのだ。

「どういづつもり、とはあの魔法を仕掛けた封筒のことを指しているのかしら？」

渚が悪びれた様子もなく逆に訊ねると、

「そう、それよ。なんでこんな荒っぽいマネをしたの？」

みちるも、耕太郎に危害が及んだこの件では怒りもひとしおらしく、鼻息を荒げて渚たちに詰め寄った。

「そうね、この手段を取ってダメだった以上、わたくしたちはもう峻佑さんや沢田さんから手を引きますわ。いろいろと混乱させてごめんなさいね」

ちひろとみちる、それぞれに詰め寄られた渚はふう、と一息ついて軽く目を閉じると、峻佑たちから手を引く、と言って謝ってきた。「なぜだ？ あれほど好戦的だったのに？ もちろん、手を引いてくれることはうれしいんだけど、あまりに急な展開にちよつと気味が悪いぜ」

唐突に飛び出した渚の謝罪に、峻佑が怪訝な顔をして訊ねた。

「そうですね、あそこまでしてしまった以上、理由も話すのが筋ですよ。わかりました。でも、このことはこの場だけの秘密でお願いしたいのですが、構いませんか？」

渚は心から申し訳なさそうな顔になると、これから話すことは内密に、と言ってきた。

「ああ、わかった。この生徒会室の壁は防音加工が施されてるから、扉が閉まつてる以上外に音が漏れる心配はしなくていい。オレたち

は人の秘密をそこらで話すような不躰なマネはしないと誓える。――オレたちだって、人に話せない秘密を抱えてるわけだしな」

峻佑は扉の外側に「会議中」の札をかけて他の人間が入室してこないようにカギをかけてから、渚にそう頷いてみせた。

「もちろん、あたしたちも信頼してちょうだいというのはちよつと無理な話かもって思ってるけど……ところで、その話っていうのはこの4人みんなで聞くべきもの？ それとも、峻佑くんだけに明かしたいとか、そういう考え、あつたりする？」

ちひろが話の内容について訊ねると、

「特にどつちかというわけではないので、このまま聞いてくだされば、それで結構ですわ。まあ、あまりもったいぶっても仕方のないことなので、始めますわ。簡単に言ってしまうえば、わたくしたちには、時間がなかったのです」

渚はちひろの思いは特に気にしないと云って、話し始めたのだが、あまりに簡潔にまとまりすぎていたために、4人とも目が点になっていた。

「へ？ 時間がないって、どういうことだ？」

峻佑がハツとして訊ねると、

「実は、わたくしと栞ちゃん、不治の病に罹^{かか}ってしまっているのです。わたくしたちの家系では4人に1人という高い割合の発症率と、一度発症したら治療手段のない、確実な死をもたらす謎の病気に……」

渚は悲痛な表情で自分らが病気であることを告げた。

「“マギルス”か……」

不意に聞こえたジェンの声。見ると、一瞬で峻佑と主人格を強制的に交代させてジェンが表に出てきていた。

「そう、その“マギルス”に罹っているのです。なんでも、魔法使い特有の病だと聞いていますが……」

渚はジェンが幽体として出てきてないので特に怖くはないのか、ジェンの言葉に頷いて、軽く補足した。

「ご先祖様、それってどんな病気なんですか？　少なくともあたしやみちるは聞いたことない病名ですけど」

ちひろも首をかしげながらジェンに訊ねた。

「昔、ヨーロッパで魔女狩りが横行していたころ、俺たち魔法使いを魔女狩り以上に悩ませた病気で、魔法使いたちの持つ魔力そのものが暴走して病原体と化し、身体を内側から破壊して死に至らしめるという非常に厄介なシロモンだ。当時はもちろん、現代でもその治療法は確立されてなく、最初の発作から大体半年以内には死亡する。お嬢さん方、キミらは最初の発作からいま何ヶ月だ？」

ジェンが詳しい説明を入れて渚たちに訊ねた。

12-2 姫野姉妹、もうひとつの秘密（後）

「わたくしが約5ヶ月、栞ちゃんが約4ヶ月半ぐらいですわ。わたくしたちの両親は罹らなかつたのですが、祖父が60歳でこの病を発症し3ヶ月で、曾祖母にあたる方が55歳で発症し、わずか1ヶ月で亡くなった、と聞きました」

渚はもう病気の治療は無理だと諦めているのか、冷静にジェンの質問に答えた。だが、その顔は数日のうちにすっかり青白くなってしまうていた。

「そうか……俺がまだ生きていたころ、知り合いの魔法使いがこの病を研究していたんだが、運命ってやつは残酷でな、そいつ自身が研究途中でこの病を発症して逝っちまった。せめて研究のレポートだけでも見つけて研究を引き継ごうと思ったんだが、すでに何者かが持ち去った後で、治療法などを探すことはできなかった。その後俺自身も流行病で死んじまってこの有様だ」

ジェンは渚たちに申し訳なさそうな表情で話した。

「いいの、栞たちはもう諦めているから。でも、たとえ死んでしまふとしても、その前に1日だけでもいいから彼氏を作ってみたくてこの竹崎高校に転校してきたの。ここには双子の魔法使いと、それを受け入れている彼氏がいるって噂を聞いたから、ね」

栞はジェンに気にしないで、と首を振ると、ようやく本題だと言わんばかりに、自分らがここに来た理由、峻佑たちに接近した理由を明かした。

「じゃあ、もしかして峻佑くんやコーくんに一目ぼれしたとか言つて、私たちが奪い取ろうとしたのって、あなたたちがもうすぐ病気で死んでしまうから、その前にやりたいことをやりたかつた、ってこと？」

みちるが栞の話した“理由”を聞いて、2人に訊ねると、2人は黙って首を縦に振った。

「そうだったの……それならそうと言ってくれれば、と思ったけど、いきなりそんな話されても信じることなんてできないわね。でも、話してくれてありがとう。あたしたちとしても、そんな境遇の人に意地悪するような性格はしてないわ。そういう事情なら——」

ちひろが何か言いかけたのを遮って、

「だったら、明日1日、オレはキミたちに全面的に協力しようと思う。ちひろ、それでいいか？ みちるとコータローはどうだ？」

いつの間にかジェンから峻佑に主人格を戻していたらしく、峻佑が渚の彼氏役を買って出、ちひろに確認すると、みちるたちはどうするのか訊ねた。

「あ、あたしはもちろん構わないわよ。ってか、それを言いかけたところでおいしいとこ峻佑くんが全部持ってっちゃうのってズルくない？」

ちひろは頷いたが、峻佑にいいとこ持ってかれたと少々不満げな表情だった。

「ああ、俺も協力するぜ」

「もちろん、そんな話聞いてなお協力しないなんてヒドイことはいわよ」

耕太郎とみちるもしっかりと頷いてみせた。

「みなさん……ありがとう。この病のことを家族以外に話すのは初めてだからどうなるか不安でしたが、優しい方々でよかったですわでも、おそらくもうわたくしたちにはホントあとわずかな時間しか残されてないのかもしれない。なので、峻佑さん。最後にわたくしを強く抱きしめてもらえませんか？」

渚は青白い顔で無理に笑顔を作ると、峻佑にそう頼んだ。

「ああ、わかった。でも、これで最後なんて言うなよ。明日、ちゃんと思い出作ろう。どこに行きたい？」

峻佑は頷くと、渚を抱きしめながら明日のことを話し、訊ねると、
「ありがとう、峻佑さん。わたくし、明日は——」

渚は峻佑に礼を言って、何かを言いかけたが、そのまま峻佑に体

重を預けてきた。

「え、ちょ、渚さん？ 渚さんっ！」

峻佑が呼びかけるが、渚が反応を見せることはなかった――

翌日、こちらは予定通りに栞と耕太郎は街に出たが、目の前で渚を失ったショックで2人ともあまり楽しむことができず、早々に引き揚げることにした。耕太郎が栞を家まで送り、じゃあな、と帰ろうとした耕太郎の服のすそを栞が掴んで引きとめた。

「お願い、栞も昨日市原くんがお姉ちゃんにやっみたいにぎゅつと抱きしめて……」

振り向いた耕太郎に、栞はそんなお願いをした。

「栞さん……キミは昨日の渚さんみたいに抱きしめてる途中で逝ったりしないでくれよ」

耕太郎は表情を和らげると、栞の背中に腕をまわして強く抱きしめた。たっぷり1分か2分ほど抱きしめ、耕太郎が腕を解いて一歩離れると、

「ありがとっ、耕太郎くん。それじゃ、さよなら……」

栞はあえて“バイバイ”ではなく“さよなら”という言葉を使つて、耕太郎に別れを告げた。

「さよならなんて言わないでくれよ。また、月曜日に学校で会おうな。約束だぜ」

耕太郎は栞に“約束”を取り付けると、姫野家の前から走り去った。栞の前ではこらえていたが、走り去った耕太郎の目には涙がにじんでいた――

週が明けて月曜日。みちると耕太郎は栞が登校してくるのを待っていたが、栞は来なかった。それどころか、朝のHRで、担任から栞が亡くなったことを知らされ、クラス中が悲しみに包まれた。

「えー、朝から暗い話で済まないが、転校してきたばかりの姫野さんが一昨日亡くなったのは昨日連絡網で回した通りだ。さらに妹の栞さんも昨日後を追うように亡くなったという連絡も入ってきた。どうも、2人とも元気そうに見えていたが、病気を患っていたらしい。明日、2人の通夜が営まれるそうだし」

2組の朝のHR。脇野が沈痛な面持ちで話すと、教室のそこかしこからすすり泣くような声が聞こえてきた。

「それと、もうひとつ。同じく転校してきた九崎くんのことなんだが、昨日電話があつて、また転校になったそうだし。親御さんの仕事の都合で土曜の夜に海外に行くことが決まった、と電話の時点で成田空港って言うていたから、おそらくはもう飛行機の中だろう。みんなに別れを言うことができなくてゴメンなさい、って伝えてほしいと頼まれたのと、昨日の日付で真野と市原宛てに手紙が私の机に届いているはずだからそれを渡してほしいとも言っていて、確かに今朝来たら手紙が置いてあった。ほら、取りに来てくれ」

さらに脇野は翼の再転校という衝撃のニュースを伝え、ちひろと峻佑に手紙があると取り出した。ちひろと峻佑が受け取って開封すると、

【ちひろさんへ 今の僕では市原くんには勝てる見込みがないとわかったので、ここは身を引きます。でも、いつか必ずちひろさんに見合う男になって帰ってくるので、待っていてください】

【市原くんへ 今はキミをちひろさんの彼氏として認めるけ

ど、きつといつかキミよりちひろさんにふさわしい男になって奪いに行かせてもらおうよ】

2人それぞれに宛てて書かれた手紙を見て、ちひろと峻佑は同時に吹き出した。

「ったく、あんな三流芸人みたいな行動をするようなヤツにオレが負けるかつての。いつ帰ってこようと関係ない。邪魔する奴は全員排除するまでよ」

峻佑は翼からの手紙を丸めてゴミ箱に投げながらニヤリと不敵な笑みを浮かべて言い、

「そうね。この先どうなるかわからないけど、少なくとも今は峻佑くんしか考えられないわ。ま、こんなこと言っても九崎くんに届くことはないけれどね」

ちひろも同様にゴミ箱に投げ込むと、峻佑の思いに応えた。教室のどこかから『よつ、バカップル!』と茶々が入り、2人はハツとして赤面していた。

それから半月ほど過ぎた。

「…………くそう、やっぱり俺が武蔵文理を目指すのは無理だったのか」
先日、渚たちを亡くして悲しみに暮れる中でも行われた模試の結果が届き、耕太郎は宣言通り武蔵文理を志望校に設定したのだが、その判定は無情のD判定だった。偏差値は47とはじき出され、明正はA判定が出ていた。

「大丈夫だよ、コーくん。約束通り、私も一緒に明正行くから」

落ち込む耕太郎をみちるが励ますが、その様子を横で見ていた峻佑がみちるの模試の結果を見せてもらうと、偏差値は65で明正はトリプルエー
AAAという最高レベルの判定、武蔵文理もA判定と、その差は歴然としていた。

「みちる…………済まねえな、こんな頭の悪い彼氏で。明正と武蔵文理

はこの竹崎からだと思えば会えるし、俺のことはほっというて武蔵文理行つたほうがみちるのためになるんじゃないか？」

耕太郎は自分のために大学のレベルを落とそうとしてくれるみちるを直視することができず、目をそらしながらみちるは武蔵文理に行けと言った。

「もう、コーくん相変わらずニブいんだから……確かに私のこの結果なら、武蔵文理も狙える位置にいるのは確かだけど、そこにコーくんがいないと楽しいキャンパスライフなんか送れないんだよ。コーくんだって、私がいらないキャンパスライフが楽しいと思えるの？」みちるは耕太郎の胸板を叩きながら、諭すように告げた。

「そりやまあ俺だってみちると一緒にいたいけど、そのためにみちるの進学を制限してしまうのはちよつとなあ……」

耕太郎は頬をポリポリとかきながら、相反する気持ちで揺れていることを話した。

「沢田くん、今からでも成績を上げたいと思う？」

不意にちひろが2人の会話に割って入った。

「そりや、できることなら成績を上げて武蔵文理にみちると行きたいけど……」

耕太郎はちよつと困った表情で答えた。

「そしたら、あたしとみちるで、勉強会をやってもいいわ。次、7月の最後の模試で武蔵文理の今回のD判定をB以上に引き上げるのが最終目標ね。どう？ やってみる？ それと、勝手に話を進めちゃってるけど、みちるはどうなの？」

ちひろは7月模試までの3ヶ月で耕太郎のD判定をB以上にまでランクアップさせるといふとんでもない計画を打ち出し、やるかやらないか訊ねた。

「やる。いややらせてください。たぶんこのまま甘えて明正に進学したら、一生後悔するだろうから」

耕太郎の目がやる気に燃え、みちるも特に何も言わず、耕太郎の

猛勉強が始まった。

あつという間に時は流れ、7月も半ば。

「さて、どうなったか……おお！ ビープラス B+！？ すごい！ 俺が偏差値57とか、奇跡としか言いようがないぜ。ありがとう、みちる、それとちひろちゃん」

ちひろとみちるが耕太郎の成績アップのための勉強会を始めてから3ヶ月。成果を確かめるための7月模試で、耕太郎は偏差値を10も上昇させ、D判定だった武蔵文理は ビープラス B+に、A判定だった明正 ダブルエープラス はA A+と、大きくジャンプアップすることに成功した。

「すごいな、ホント。たった3ヶ月でここまで上げるなんて……」

峻佑は進学せずに就職する方向性を決めているので、模試は受けておらず、成績を大きく上げた耕太郎を祝福していた。ちひろとみちるは耕太郎の勉強を見ていたからと言って自分たちの成績をおろそかにしていたわけでもなく、ちひろは4月に64だった偏差値を67に、みちるも65だった偏差値を66にそれぞれ上げ、これで進学する3人とも武蔵文理の志望が確定したが、さすがに学部まで一緒に、というのは無理があるので、ちひろが文学部、みちるは経済学部、そして耕太郎はコンピュータを主に扱うメディア学部を志望する方向で固まった。

その後、2学期に入ったところに突然渚と栞の幽霊が現れて校内がパニックになったり、なぜか彼女たちも幽霊のままとどまり、峻佑の近くに居続けると言ったことからちひろと峻佑がケンカしたり、卒業まで騒ぎは続いていたが、それでも進学しない峻佑を含めて4人ともガッチリ成績はキープし、受験組の3人は無事に武蔵文理大学のそれぞれ志望学部への合格を決め、峻佑は不況で高校生の内定獲得が伸び悩む中でなんとか1社だけ内定をもらうことができ、就

職を決めた。

「今日からオレとみんなは別々の道だ。でも、そんなことでオレたちの友情や絆は壊れたりしないよな」

卒業式で前生徒会長として答辞を述べ、新会長になった賢悟に涙で送り出された峻佑が、校門のところで立ち止まると、ちひろたちのほうを振り返って不安げにつぶやいた。

「当たり前だろ？ 中学からの腐れ縁な俺たちが今更壊れるようなヤワな絆しかないなんてことあるわけないだろーが」

耕太郎はフツと鼻で笑い飛ばすと、峻佑と拳をコツンとぶつけ合った。

「たとえ進む道が違ってても、あたしが峻佑くんの彼女であることやあたしとみちるが峻佑くんの家に暮らし続けることも含めて何も変わらないのよ。1人だけ違うから不安かもしれないけど、あたしたちはいつもそばにいるから、そんなに不安にならなくても大丈夫だよ」

ちひろは峻佑に歩み寄って優しく抱きしめると、励ましの言葉をかけた。

「そうだよな、こんな程度の不安、1年前のアレに比べたら屁でもないじゃねえか。おかげで目が覚めたぜ。ありがとうな、ちひろ」

峻佑は目じりにうっすらと涙を浮かべてちひろに礼を言くと、4人で歩く最後の通学路を思い出話に浸りながらゆっくりと歩いて行った。

完

14 エピローグ（後書き）

これにて完結です。

続編は作るのが難しい、と改めて実感させられました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5972h/>

幼なじみは 魔法使い！？ 第2章

2010年10月8日14時09分発行